女子恐怖症＋ヒーロー気取りな奴＝僕

こいん0712

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女子恐怖症＋ヒーロー気取りな奴＝僕

【Ｎコード】
Ｎ９６９４Ｋ

【作者名】
こいん０７１２

【あらすじ】
女子恐怖症の主人公裕介
裕介は、ヒーロー？になりたくてナンパされていた一人の女子葵を助ける
それが、きっかけで裕介のヒーロー伝説（恋物語）が始まる
裕介の女子恐怖症は治るのか？
裕介の初恋の人とは？
笑いあり（９割嘘）涙あり（３割嘘）青春ラブストーリー（これは本当）

今始まる！！

第一話　ヒーロー（前書き）

どうも、こいん０７１２です
読みかえしていて過去の自分を殴りたくなったので少しずつですが
完結させる前に手直ししていきたいと思います。完結を楽しみにし
ていた皆さん、すいません。

第一話　ヒーロー

「なぁいいじゃねぇかよ。なっ？」
「嫌って言ってるじゃないですか！」
名前は知らない女の子が道路の隅でナンパされている。僕が見て見ぬふりをし通りすぎようとすると彼女は泣いている赤子の様な不安で一杯の目で僕に助けを求めた、気がした。きっとそうなのだろう。嫌がってるみたいだし。僕は少し怖がりながら裏返った声で話かけた。
「あの、彼女も嫌がってるし辞めた方がいいと思いますよ」
「ああん？　誰だテメェ？」
世間で言う不良の人に胸倉をつかまれ僕は少し痛みと恐怖を感じだ。彼が世間で言う不良なら僕は弱虫だ。だから胸倉をつかまれただけでも恐がってしまう。だから、本当は助けるつもりなんて無かった。でも、どうしてかどうにかしようと思ってしまった。
「僕ですか？　僕は、緒形裕介（おがたゆうすけ）です」
そう僕は、緒形裕介。身長は百七十六センチ強。昨日計ったらそうだった。学年は高校二年生。顔はイケメンって程じゃないし学力も普通だ。運動神経は少しだけなら自信はあるけど運動部の人達には負けると思う。喧嘩は……
「調子に乗ってんじゃねぇぞ！」
『ボコッ』という効果音が聞こえてきそうな勢いで僕は頬を殴られる。頬には鋭い痛みを感じその勢いで泣きそうになってしまう。その後も何発か殴られたがどうにか泣かないで済んだみたいだ。まあ、こんな感じで喧嘩は病的に弱い。小さい時は活発だったらしいけど今は大人しめの僕だ、力がそんなにあるってわけでもない。これが弱い原因の一つでもあるのだろう。
「おう兄ちゃんや、女の前でヒーロー気取りもいいけど調子に乗ってると死んじゃうぜ俺達は、優しいから、これくらいで許してやる

けどよハ八っ」
不良しゃがみながらは倒れている僕にそう吐き捨てた。なんでだろう、こうなることは分かっていた、分かっていたのにどうして悔しいんだろう。この時は痛みではなく悔しさで涙が出そうだった。
「じゃあな、お姉ちゃん、あのガキに感謝しろよ」
不良はそう言いながら何処かへ行った。
痛っ……口んなか切れてるや、帰ったら消毒とかしないとな。色んなとこに傷出来てそうだし。
『ヒーロー気取り』僕の頭にはその言葉が浮かぶ。周りから見たらそうかもしれない。というか、そういう風にしか見えないだろう。知り合いってわけでもないし、しかも助けようとして負けてるし。結果的には助けられたけども。こんなのただの偽善だ。だけど、だけど助けようとした、彼女を。多分僕は僕の様な人をこれ以上増やしたくないだけなんだと思う。これが助けた理由。僕は昔イジメられてた。原因は女子。何にも悪くないのにイチャもんをつけられイジメがスタートした。最初は女子からだけだったんだけど男子も加わってき、暴力も受けていた。こんな、僕の様に一生忘れることの出来ないトラウマを植えつけられる子を見たくないんだ、僕は。それが苦手な女の子であっても。
『ヒーロー気取り』頭の中で何回も繰り返す。気取ってるだけでもいい、こんな僕でもヒーローになれるのかな。
「あのっ、ありがとうございました」
名前もしらない女子が頭を下げている。……すっかり、この子のことを忘れていた。なんていうか、うんごめんなさい。
「……」
僕は、黙ってそいる。相手は苦手な女の子だ。あんまり話したくもない。触れたりするのもちょっと、あれだ怖い。こんな女子恐怖症の僕。女子なんかと喋っても意味はない。大丈夫ですか？　と心配している彼女に「大丈夫」とだけ行ってその場を立ち去った。……どんだけヘタレなんだよ、僕。

＊＊＊

「っつ！　もうちょっと優しく出来ないもんなの？」
頬の傷に消毒液が染み殴られた時と同じくらいの激痛がはしる。染みない消毒液ってないのかな、もしあるんなら１０００円くらいしても買うのに。
「仕方ないでしょ！消毒は痛いものなの」
こいつは僕の妹の美奈。結構僕になついてくれてそのせいか、美奈は怖くもなんともない。まあ、家族は全然大丈夫なんだけども。今は、美奈に傷の手当てをしてもらってる。僕とは大違いで手先が器用で傷の手当てなんで朝飯前って感じだ。兄として本当鼻が高いよ。
「何で、お兄ちゃんは嫌いな女子の為にここまでボロボロになるわけ？」
「いいじゃないか、僕の勝手だろ」
僕がそう言うと美奈は心配そうな顔をしそうだけど、とだけ言って消毒液やらなんやらを救急箱に戻しゴミをゴミ箱へと捨てた。……なんという手際の速さ。あれだな美奈は絶対に良い嫁さんになるな。
「手当てありがとうな」
僕は、美奈の頭をなでると自分の部屋に行った。

自分の部屋に来たものの暇だし…寝るか。
……とか、思うけどまったく寝れない。しょうがないファミレスでも行って時間潰そうかな。さすがに一人で行くのも気が引けるから美奈でも誘おう。
「美奈ー！　今からファミレス行くんだけど一緒に行かないか？奢ってやるぞ」
「ホントに！？　行く行く」
即答ですか美奈さん…食い物目当てなのか、それとも単純に僕との

お出かけが嬉しいのか……完全に後者は自惚れ過ぎ、か。
「用意するから待ってて！」
素直で可愛いなぁ、美奈は。本当に可愛い。って、あれだからね僕シスコンじゃないからね妹としてだからね、美奈あれだし小五だし。
うん。

第二話　炭酸ジュース

いつもと変わらない朝。美奈に起こされて朝食を食べて、準備をして登校する。いつと変わらない一日。
学校で机に向って勉強をし、友達と遊んだり、喋ったり。そんな、いつもと変わらない日だと思ってた。だけど違った……思えばこの時からかも知れない僕の日常が変わり始めたのは。

＊＊＊

「ねぇ里香。緒形くんって、知ってる？」
私は校内で売ってる自動販売機で買った紙パックのジュースを飲みながら彼女に聞いた。彼女は私の友達の里香（りか）。凛とした顔立ちで綺麗な子。内面はちょっとあれだけど結構人気あるみたい。
やっぱり同じ学校、同じ学年だから顔と名前だけは知ってたけど……だけど、それだけ。ただ、それだけ。だから自称データマンの里香に聞いてる。私が内面はちょっとあれって言ったのはこれのことだ。彼女は色々調べたりするのが好きみたい、ほんのたま～にだけどストーカーまがいのことをしちゃってる。まあ、緒形くんの事聞けるから万々歳なんだけどね。里香は鞄から黙ってノートを取り出す。開くかと思ったら開かずに手を出した。彼女がこれをする時は必ずしも私のお兄ちゃんの写真を欲しがる時だ。どうやら里香はお兄ちゃんのことが好きみたいで事あるごとに欲しがる。格好良い、格好良い言ってるけどそうでもないと思うんだけどな～、うん。
「ちょっとそこ。私は『好き』なんじゃなくて『ファン』なんだからね。後、陸さんは　めちゃくちゃ格好良いんだから！」
はいはい、そうですか。分かったから人の心を読まないでください。
私は苦笑いしながらお兄ちゃんの写真を渡す。すると里香はすぐに魅入って自分の世界に入りいつものクールな里香とは思えないほど

ニヤついていた。
「ちょっとそこ。お兄ちゃんの写真見てないでさっさと緒形くんのこと教えてよ」
「あ、そだった。ごめんごめん」
里香は笑いながらそう言うとノートを開き口を開いた。
「ん～っと……同じ学年なのは知ってるよね。組は私と同じの三組。誕生日は七月二十　五日。好きものは炭酸ジュースとゲーム。嫌いなものは人込みの多い場所、行事。帰宅部で一人暮らしってわけじゃないけど家のためにバイトしてるみたいよ。アンタと違って偉いね」
里香は勝ち誇ったような冷徹な目で私を見ながら鼻でふっと笑った。あんたどこの悪役だよ。そういうのは放っておいてください。私が少しスネていると里香はスラスラ話しをしていく。
「アンタ昨日助けてもらったって言ってるけど何かおかしくない？　緒形裕介って女子　恐怖症だよ。中学生の頃イジメられてたらしくてさ」
そ、そうなんだ……そんなの知らなかった。だから昨日、お礼言っても殆ど喋ってくれなかったのかな。でも、あれだよねあそこまでしてもらったんだからお礼くらいちゃんとした方がいいよね！　うん！　女子恐怖症とか関係ないもん！
「大変だねぇ、葵も。こんな奴を好きになっちゃうなんてさ」
「そ、そんなんじゃないよ！」
里香は意地悪そうな顔をして私は顔が真っ赤だった。と、思う。そりゃ助けてもらった時……少しは格好良いとか思っちゃったけどさ、ちゃんとお礼したいだけなんだから。だけなんだから……この時、私はまだ気付いてなかったんだ。何故、彼が格好良く見えたか、気になってしょうがなかったその理由を。

＊＊＊

「緒形君！」
何か見たことあるような女の子がコンビニの袋を持ちながら僕の名前を呼んだ、しかも大声で。ああ……昨日、不良に絡まれてた女の子だ。元気そうで良かった、良かった。
でも何で話かけてきたんだろう、お礼したいから～とか言うのはないよね、さすがに。嬉しいのは嬉しいけど勘弁して欲しいや。
「あの、昨日はありがとうございましたっ。これ良かったら飲んでっ。」
彼女は満面の笑みで袋を僕に手渡す。僕は出来るだけ手を触らない様にして袋を受け取った。チラっと覗きこむとそこにはコーラやサイダーが数本入っていた。……何故、炭酸？　僕が不思議そうな顔をしていると彼女は「す、好きって聞いたから！」と戸惑いながら言ってくれた。
「ああ」
そう言うことか。確かに好きだけど……これはお礼としてはどうなんだろう。少し変な気がするや。まあ、良いんだけどね女の子から貰ったって言う時点であんまり飲みたくないし。美奈にでもあげよう。多分あいつ可愛い顔して喜ぶだろうなー……って、僕あれだからねシスコンじゃないからね妹思いな兄だからね本当勘違いだけはやめてね。
「あの、私ね浅倉葵（あさくらあおい）って言うんだ。お礼したりないから　……明日さ食事に行かない？　あ、勿論私の奢りだからねっ」
何を言っているんだこの人は。ただでさえ喋るのも嫌なのにどうして女の子と食事に行かないといけないんだよ、これは何かの罰ゲームか？　ゲームなんてした覚えないぞ、僕は。
この後、断って誘われ断って誘われと言う流れが続いたが何故か朝倉さんがキレ強引にも行くことになってしまった。メールするって言ってたけど……知ってるのかな僕のアドレス。来なかったら来なかったでラッキーだから全然良いんだけど。それにしても今日は暑いな。まだ初夏だって言うのに、ホント困っちゃうよ。教室にまで

水筒取りに行くの面倒だしなぁ……少し飲んでも大丈夫か、うん死ぬわけじゃないんだし思い切ろう。僕は暑さに我慢できず袋から炭酸ジュースを出し一気に飲んだ。お茶の様に一気飲みできるわけもなくシュワーっと僕の身体を刺激する。炭酸ジュースの冷たさと刺激が心地よく初夏の暑さなんて忘れてしまいそうになった。……これは、浅倉さんにちょっとだけ感謝しないとな。ありがとう、浅倉さん。

第三話　無関心そして疑問

バイトがあった上にさっきまで美奈にゲームをさせられていたためかなりの疲れが溜まっていた。ベットに横になるとすぐに寝れるくらいだ。ていうか、もう横になろうとしている。しかし横に鳴る前に携帯の着信音が静かな僕の部屋に鳴り響いた。多分、浅倉さんだろうけどどうしようか。返さないってのも人間としてどうかと思うよね……仕方ないか。浅倉さんからの誘いのメールに対し「了解です。集合は駅前のゲームセンターで」とだけ返しておいた。時間と日にちは向こうからの指定があったから大丈夫だろう。返信したからもう寝ていいよね。本当に眠いや。僕は部屋の電気を暗くすると目を瞑り段々と夢の世界に入っていった。

朝起きると僕は携帯で何時かをチェックした。時間と同時に目に入ったのはメールの新着通知二件だった。一件は今流行のクーポンだ。ちなみに僕がバイトをしている店の。もう一件は……浅倉さんからだった。メールを開くとそこには「おやすみぃ」と書いてあった。……おやすみ、てメールで言う事なのかな。う～ん。あんまりメールとかしたことないから分からないや。ま、いいか別に特別仲が良いってわけじゃないしねスルーしよう、相手女子だし。一応な待ち合わせは明日なんだよね眠いからもう少し寝よう。僕が目を瞑ると多きな物音と同時にドアが開いた。

「お兄ちゃん！　ゲームしよっ、ゲーム！」

またゲームか、美奈。たまには外で遊べよ……そう思いながらも一緒に遊んでしまう僕であった。

＊＊＊

時はさかのぼり昨日の１０時くらい。って私何意味不明なこと言ってるんだ。
緒形くんからメール返って来ないな…うぅ～、何でだようぅ。おやすみぐらい返してくれたって良いのに。里香だったら絶対に返してくれるよ？　お互いが納得するまでメールしてくれるよ？　それなのに緒形くんったら酷いなぁ……うぅ～来ないよぉ。
私はリビングの茶色いソファーの上で足をバタつかせる。もう一回メールしてみようかな、でもしつこい女って思われるのも嫌だしなぁ……
「うぅ～」
「どうした、葵。携帯握り締めながら唸って。彼氏から返信来ねぇのか？」
「そ、そんなんじゃないもん！」
何言い出すのよ。ったく、バカなんだから。何でこんな奴のファンなのよ里香は。お兄ちゃんなんかに全っ然良いとこなんて無いんだから。きっと現実知ったらショック受けるだろうなぁー、里香。……そんなことはどうでも良いとして！　本当にメール来ないや。
私は三角座りで携帯の画面を見てゆっくりとため息をついた。
「はぁ～」
これじゃぁ、本当に彼氏から返信待ってるみたいだよ。なんで友達でもない緒形くんの返信をこんなに楽しみにしてるんだろう。分からないよ、私……

第三話　無関心そして疑問（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
感想、評価、アドバイスよろしくお願いします

第四話　幼い記憶、葵の願い（前書き）

どうも、こいん０７１２です今回はオール葵視点の話です
後感想頂けたら嬉しいです。小説書く励みになるので

第四話　幼い記憶、葵の願い

緒形君とデート…？　の前の日、私は明日着ていく服を考えていた。お兄ちゃんに聞いてみたけど「そんなの、どうでもいいだろ」しか言わない。なんて、バカ兄貴なんだお兄ちゃんは。

「女の子には女の子なりの事情があるんだもん」そう一人で呟きながら開けっ放しのタンスに手を伸ばす。そして、それを閉めようとすると何かに引っかかる。私は引っかかる様な物ないのにな、と疑問に思うもそれを手にとった。

「これって…」

「葵！　俺のTシャツ知らね？」

私がそれが何かを言おうとするとお兄ちゃんが上半身裸でいきなり入ってきた。私はそれに吃驚して手元にあった明日着て行くつもりだった服を投げた。お兄ちゃんも驚きすまん！　と、だけ言って戸を閉めた。まったくもう。お兄ちゃんってばデリカシーのかけらも無いんだから。それでは、改めて。

「これは……えっと、緒形君の写真だよね？」

な、何だこの状況は、まったくつかめない。私の初恋の柴崎君が緒形君で明日、一緒に遊ぶ緒形君が柴崎君？　……とりあえず、里香に電話してみようか。充電中の携帯電話を手に取り慣れた手付きで里香に電話をかける。

「あ、もしもし里香？」

「何よ、こんな時間に」

こんな時間って……まだ、１０時じゃないのどんだけ早く寝るのよ里香は。

「えっと。聞きたいことあるんだけど通ってた中学校に柴崎君って居たじゃない？」

里香は眠たそうな声でうん、とだけ相槌をうつ。すいませんね、電話なんてしちゃって。でも、今。今、知りたいことだから仕方ない。

「その柴崎君と緒形君って、似てるよね？」
「似てるっていうか、同一人物だよ。親が離婚して母方の名字『緒形』になったの」
え、何それこの前言ってくれたら言いじゃない！　と私が言おうとすると里香は「じゃ」だけを蚊の鳴くような声で言い、電話を切った。……どんだけ、マイペースなんだあの人は。まあ、慣れたから良いんだけどさ、っていうかこっちが悪いんだけどさ、なーんか傷付いちゃうな～
でも、緒形君って柴崎君だったんだ。どうりで、見覚えがあるわけだ。って、何納得してんだ！
一人で意味不明なやり取りをしたところで、柴崎君改め緒形君の写真を手に持ち目をゆっくり閉じるとあの日が昨日のことの様に思えた。悲しい記憶、頭の中から消し去りたい、あの日の記憶……

＊＊＊

「あの。私と付き合ってください！　貴方に助けられた時から好きでした」
やった、遂に言っちゃった。ずっと言えなかった言葉。柴崎君に助けられた時からずっと言いたかった言葉。里香や、他の友達に背中を押してもらってやっと言えた……里香、やったよ私。ちゃんと言えたよ。
でも、
「ごめん、君とは付き合えないよ。本当にごめんなさい」
勇気を出した言った言葉も意味無く悩んだ意味もなく現実はあまりにも儚くて、酷で今すぐにでも目から涙が溢れそうだった。それが君の答えなんだよね、仕方ないよね。そう自分に言い聞かそうとしても、そんなこと出来ない。
「浅倉さん…だったよね？　えと、気持ちは嬉しいんだけど知っての通り僕良いとは言えない状況なん　だ」

ヘラヘラ笑いながら言う。でも目は悲しそうで悔しそうでその目を見ると私の悲しさなんてどうでも良い様に思えてきた。知ってる、知ってるよ柴崎君私のせいでイジメられてるんだよね？　私を不良な女子達から助けてしまったからイジメられてるんだよね？　柴崎君からしたら私の悲しさなんてちっぽけなもんだけど、嫌だよ諦めたくないよ、私の勝手な思いだけど一緒に居たいよ……

そう思う私の願いなんて叶うことなぞなく、柴崎君は「迷惑かけたくないんだ、浅倉さんに。…じゃあね」そう吐き捨ててどこかに行こうとした。すると私の体が勝手に動き手を掴み柴崎君と唇を重ねていた。

「あ、ごめん！」

私は頭を下げすぐに逃げて行った。もう、諦めよう。恋なんて絶対叶わないんだ、もう…もう……

＊＊＊

「諦めたつもりだったんだけどなぁ」

今だから少し笑い話にできるけど、あの時は本当に悲しかったな。里香にも迷惑一杯かけたや。なんか、緒形君女子恐怖症らしいけど優しいところ全然変わってなかったや。この前も昔も助けてもらったし、あの時の『迷惑』の意味ようやく分かったよ…本当に優しすぎるよね、緒形君って。

「本当にバカ」

もう恋なんてしないって思ったけど、同じ相手なら仕方ないよね。あれは無効という事でお願いします。

今度の恋は上手くと行くと良いな。ま、向こうにもその気があったらだけど。

私はクスりと笑いながらこう思う。神様、居るならお願いします。今度こそは私の願い叶えください。

第四話　幼い記憶、葵の願い（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます　感想、評価、アドバイスよろしくお願いします

第一章　第5話　僕とお礼と（2）

今日、浅倉さんと食事に行くんだっけ、準備しなきゃ
僕は、黙々と準備をしていると、美奈が起きてきた

「オハヨ、お兄ちゃん今日どこか行くの？」

「おはよう美奈、ちょっと友達と遊びに行くんだ」

「そうなんだ、今日お兄ちゃんと遊んでもらおうと思ったんだけど」
遊んでもらおうと思ったってもう、小5だろ。普通は嫌がるでしょ

「ゴメン美奈また今度な」
僕は、美奈の髪の毛をワシャワシャした

「うん」
美奈はそう言って、洗面所へと向った

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

昼11時くらい

・・・・・・・・早く来すぎてしまった
女子と遊ぶなんて初めてだから、緊張してるし
はぁ〜何で女子なんかと遊ばなきゃいけないんだよ
帰ろうかなでも「うん」って言っちゃたし（ほぼ無理矢理だけど）
時間まだあるしゲームでもしとくか

僕は、ＵＦＯキャッチャーを見て回ってた
「あっ」あれは、美奈が欲しがって何かよくわからないクマシリーズの人形
持っとくのはめんどくさいけど、今日遊んでやれなかったし、獲ってやるか

みるところ、アームの力はかなり弱いな
ホント嫌な商売してるぜ
けど、僕にかかればこんなの・・・・・・・・・・
ウィーン（アームが横に動く音）ウィーン（アームが前進する音）
ガシ（アームが景品を掴む音）
一発っと
ボトっ（景品が景品ゲットゾーンに落ちる音）

これで美奈も喜ぶでしょ
僕が、景品を取り横にある袋に入れてると、女子高生ぐらいの人が見ていた
僕は、無視して行こうとしたら
「あのっ、私お金は払いますんで獲ってくれませんか、私もそのクマの人形好きなんです」
急になんだよ、ていうか何で僕がやらないといけないんだよ
「彼氏にでも頼めば」

「私彼氏はいません」
はぁ、何それ今の女子高生って言ったら普通いるんじゃないの？
「仕方ないなぁ、じゃあ、お金ちょうだい」
こんなん余裕だからいっか、減るもんじゃないし
「は、はい」

チャリンっ（コイン入れた音）

こんなもん何回もやっても・・・・・・・・・・・・・
ウィーン（アームが横に動く音）ウィーン（アームが前進する音）
ガシ（アームが景品を掴む音）
一発っと
ボトっ（景品が景品ゲットゾーンに落ちる音）

「ほい、」
僕は、景品を投げた

「ありがとうございます」

「・・・・・・・・・・・・・・」
僕は、その場を黙って去った
やっぱり、女子と話すのは苦手
また、僕はＵＦＯキャッチャーを見て回っていた

「おおっ」
これは、大人気ゲームモンスターハ〇ターのア〇ルー
僕が大好きなやつだ
「全６種か・・・これは全部ゲットせねば」
僕は、すぐさま両替してきて、お金を入れた
チャリン
これもアームの力かなり弱いな
でも、こんなの僕にかかったら
ウィーン（アームが横に動く音）ウィーン（アームが前進する音）
ガシ（アームが景品を掴む音）
一発っと
ボトっ（景品が景品ゲットゾーンに落ちる音）×６
僕がア〇ルーを獲っているといつの間にか僕の周りにすごい人盛り

が出来ていた

「すげぇ」「神だ」「ウマいね君」などの声が聞こえてる
僕は、人形を袋に詰めその人盛りから脱出した

そして、脱出すると店員が睨んでいる
僕は、それを無視して走って逃げた
なぜか逃げてしまった
何でだろっ

さすがに調子こきすぎたな、持つのが大変
一つ一つが結構なサイズだから、かなりジャマだし重い
う～んどうしよう、持つのがツラくなってきた、誰かにあげようかな？でも、それはもったいないし
「お～い、緒形君」
ん？誰だろ僕の名前呼んでるけど・・・・・・・あっ浅倉さんか、
そういえば約束してたな
ア○ルーに集中してて、忘れてた
そして、浅倉さんが近くに来た
「どうしたのそれ？」

「調子に乗って獲りすぎた」

「えっ全部緒形君が獲ったの？凄いじゃん緒形君、」
そんなに、凄いかな？僕にとっては普通なんだけど

「でもそれ、ご飯食べに行く時に持ってくわけじゃないよね？」

「・・・・・・・・・・・・・」
そうだ、それを悩んでいたんだ

「駅のロッカーに入れとけば？」

そうか、その手があったかナイス浅倉さん

「そうする」

僕は、駅に向かいロッカーに入れた

駅のロッカーは意外と大きいので案外簡単に全部入った

「じゃあ、行こっか」

僕は、黙って頷く

ーー葵ーー

ふぅ～遂に来たぜ、待ち合わせの場所

何てカッコ付けてる場合じゃないよ

スッゴイ緊張する、だって私の初恋の人とご飯食べに行くんだもん

結局服は、勝負服で来ちゃったし

どうしよう、すっごいドキドキするよ

顔赤くないかな？

ーー裕介ーー

何食べに行くんだろ、結構楽しみだな

友達と、飯食うの久しぶりだし

美奈とはよく食べるけど

「ついたよ」

浅倉さんが指をさしたのは、一件の定食屋

見た目は老舗って感じでかなり期待できそう

「ガラっ」浅倉さんがドアを開ける

「いらっしゃい、」店員が元気よく挨拶をしている

「父ちゃん、連れて来たよ緒形君」

はっ？今何と

「おうっその子が、お前を助けてくれた緒形っちゅう子かいな」

「そうだよ、父ちゃん」

お父さん？らしき人が厨房から出てきた
見た目はかなりゴツイ、はっきり言って恐い

「ありがとうございます。うちの娘を助けてやって下さって、本当にありがとうございます」
ゴツイおっさんは頭を下げた
もう僕には、何がなんだかわからない
それでも、何か返事をしなければ
「いえ、そんなヒーローとして当然のことをしただけですから」
って何言ってんだ僕、ヒーローって周りは引くに決まってるのに

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
変な空気になっちゃったしどうしよう
「ダッハハハハ、緒形さんはヒーローなんですかい、そりゃあよかったじゃあ、ヒーローさん家で飯でも食っていってください」
この定食屋の人達は、笑ってくれた。よかった、変な空気にならなくて、マジでよかった
それにしても、このおっさん話し方変だな

「はい」
そのために来たんだから食うっつぅの

「じゃあ、緒形君座って」

「うん」
僕は、浅倉さんが指差したイスに座る
「何にする？」
浅倉さんが聞いてくる
「とんかつ定食で」
「父ちゃんとんかつ定食一丁」
「あいよっ」
元気いいなこの親子
浅倉さんもイスに座ってる
「ここ、私の家なんだ」
そんなことわかってるつぅーの
「そうなんだ」
僕は適当にながした
すると、とんかつ定食が僕の目の前に運ばれて来た
見た目はかなり美味しそう
「いただきます」
「どうぞ」
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
ウマイ、かなり美味い

「どう、美味しい？」
僕は、黙って頷いた
浅倉さんも、とんかつ定食を食べている
「私ね、将来旦那さんとこの、定食屋するのが夢なんだ」

「そうなんだ、浅倉さん可愛いから多分夢叶うよ」
何言ってんだよ僕、浅倉さんの夢なんてどうでもいいのに

浅倉さんは顔を真っ赤にしている
ーー葵ーー
何言い出すのいきなり、「浅倉さんは可愛い」って初恋の人に言われると照れるじゃない
顔赤くなってないかな？大丈夫かな？

ーー裕介ーー
「ご馳走様でした。僕、この後用事あるんで帰ります」

「おうっまた食べに来てな、緒形さん」

「わかりました。では、さようなら」
浅倉さんはボーっとしてるけどまっいっか

ーー葵ーー
よし、ここはどこかに、連れ出して緒形君に私の事覚えてるかどうか聞こう
うん、そうしよう
「緒形君！」
っていないし
えっどこ行ったの？緒形君
「父ちゃん、緒形君は？」

「緒形さんならもう帰ったで？」

ええぇーーーーーーなんで帰ったのよ緒形君のバカーーーー

ーー裕介ーー

僕は駅のロッカーに入れておいた人形を取って、家に帰ってきた

「お兄ちゃんお帰り！！」美奈がいきなり抱きついてきた

「ただいま、美奈」僕は、背が小さい美奈の頭をなでる

「美奈、これ遊んでやれなかったお詫び」

僕は、クマの人形を美奈に渡した

「あーこれ、私が欲しかったやつだ。ありがとうお兄ちゃん大好きー」美奈がまた抱きついてくる

ふふっ美奈はやっぱり可愛いな

・・・・・・・・・何回も言うけど僕はシスコンでもロリコンでもないからね、そこんとこよろしく！

第一章　第5話　僕とお礼と（2）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

美奈の性格がウマく定まりません、結構大事なキャラなのに（泣）

余談ですがクマって、「クマ」って書くとかわいらしいですけど

「熊」って書くと恐いですよねなんでだろっ？

感想、アドバイス、評価お願いします

第一章　第6話　僕と2度目のキスと（前書き）

どうも、こいん０７１２です
お気に入り登録一件増えました
嬉しいです、そしてありがとうございます
でも・・・・・感想がなくて寂しいです
感想よろしくです

第一章　第6話　僕と2度目のキスと

昨日、浅倉さんがボーっとしてるうちに帰ってきたけど大丈夫かな？
まぁ、浅倉さんのお父さん（以後おっさん）にちゃんと挨拶はしたし大丈夫か
ーー葵ーー
何で、昨日私に黙って帰ったんだろう？
私のこと嫌いになったかのかな？いきなり両親に会わせるから
・・・・・・・・・そんなことないよね
よしっメールして川原に呼んで話しよう

ピロリィ～ン♪
返事キター
「ヤダ」
それだけ！？一言でヤダって結構傷つくんだよぉ

「いいじゃない別に、減るもんじゃないし」っと送信

ピロリィ～ン♪
返事が来た

「あんま、女子とは話したくない。けどちょっとだけならイイヨ」

マジで！！やった
その後、場所を指定して、私は待ち合わせ場所に向った

「オッス」
私は、緒形君を見つけ手を振った

「ども」緒形君の挨拶はそれだけだった

ーー裕介ーー

「で、話って何？」

早く帰りたい

「話ってわけじゃないんだけど緒形君ってさ好きな人とかいる？てかっ人を好きになったことある？」

いきなり何言いだすんだコイツは

「私ね、好きな人がいたんだ」

「へぇ～」

適当に流しとけばいっか

「中1のころなんだけどね。ホント普通の人で、でもさその人イジメられっ子だったんだよね

クラスからも、学年からも無視されててさ、でもねその子周りには優しかったんだ

自分が、無視され続けても、どんなに酷い事されてても周りには優しかったんだ

私もさ、その子の事、無視してたんだよね、でもある日私が、ヤンキーの上級生に絡まれたらさ

助けてくれたの、その子が喧嘩は弱いのに、ボコボコにされてるのに、私の事を守ってくれた

それがきっかけでさ、彼の事が好きになってたんだよね

で、告白したら、振られちゃった「僕といたら君もイジメの標的になるから、君とは付き合えない

ゴメン」だってホント優しすぎるよね、どこまでも」

「そうだね・・・・」
何か、そいつ僕と似てるな
僕は、いつのまにか浅倉さんの話を真面目に聞いていた

「僕もさ、中1のころ好きな人いたよ
名前も顔も覚えてないけど（笑）
でさ、その子に告白されたんだ。その時はテンション上がったな
でも、断った。」

「何で？」

「ここからはさ、浅倉さんの話と似てるんだけど、僕イジメられてたわけよ。

そんでさ、自信が無かったんだと思う、その子を守る、一緒に居る自信が
僕は、いじめられっこだから、彼女と付き合ったとしても彼女は嫌な思いするだけだって
そう思ったんだ、だから断った。その後、女子恐怖症になって、彼女と話すらしなくなったわけ
ホント笑えるよね」
何言ってんだ僕
こんなこと、女子に言っても意味ないじゃないか、僕の初恋の人に、
僕が好きだった人に、
・・・・・・浅倉さんに、葵さんにもう一度会えるわけじゃないんだ！！！！！！！！！！
えっ？

僕の思考回路が止まる
僕と浅倉さんの唇が重なっていたからだ

簡単に言うと浅倉さんが僕にキスをしたって事
ーー葵ーー
「そんでさ、自信が無かったんだと思う、その子を守る、一緒に居る自信が
僕は、いじめられっこだから、彼女と付き合ったとしても彼女は嫌な思いするだけだって
そう思ったんだ、だから断った。その後、女子恐怖症になって、彼女と話すらしなくなったわけ
ホント笑えるよね」
そんな事言わないでよ、あなたは私を二度も助けてくれたじゃない、あなたは私に優しくしてくれたじゃない、いつも、いつも、なのにそんな事思ってるなんて、私が告白したから、私のせいで苦しんでいたなんて思ってもいなかった
私は、ただあなたが、いつもの優しさで私を振ったって思ってたから
緒形君、今苦しみから解放してアゲル

チュっ
私は、緒形君にキスをした
緒形君との2度目のキス

ーー裕介ーー

二つの出来事が僕を混乱させた
一つは僕の、初恋の人が浅倉葵さんって言う人つまり今僕の目の前にいる人だってこと
二つ目は、浅倉さんにキスをされた時の感覚に覚えがあるってこと
僕と浅倉さん、キスをするのは今回が初めてじゃない
僕達は、前にもキスしたことあるんだ
全部思い出した

そうあれは、中1の夏

第一章　第6話　僕と2度目のキスと（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
後3話くらいで一章（僕の中での）が終了する予定です
感想、評価、アドバイスよろしくお願いします

第一章　第7話　僕と初恋の人と始めてのキスと（前書き）

どうも、こいん０７１２です
今回は、裕介の回想話です

第一章　第7話　僕と初恋の人と始めてのキスと

あれは、中1の夏
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
ミーンミーン
セミのうっとうしい声が鳴り響く校舎裏に僕は呼び出されていた

僕を呼び出したのは、3組の浅倉葵さん
僕が密かに想いを寄せる人

「あの・・・話って？」
この時の僕は結構内気な性格だった

「私ね、柴崎君の事好きなんだ。だから付き合ってくれないかな？」
この時は、正直に言ってかなり嬉しかった、多分今まで生きて来た
中で一番嬉しかったと思う

でも・・・・・・・僕は、彼女とは付き合えない
僕は、いじめられっこなのだから、僕と付き合うと彼女まで標的に
なるし、彼女はきっと傷つく
好きな人が傷つくのは見たくない

僕は、今の僕には彼女と付き合う資格がない
そう思って告白しなかった
でも違うんだ、僕は恐いんだ。彼女が傷付くのが、彼女がイジメの
標的にされるのが、彼女を守れない自分がそんな自分がいると想像

するだけで
僕は、そんな恐怖には耐えれない
「ごめん、君とは付き合えない、僕と付き合ったら君まで標的にされるよ僕は、女の子が傷付くのは見たくないからさ」
「・・・・・そっか、ありがとうね。正直な気持ち聞かせてくれて」
「ううん、僕も断っちゃってごめん」
「あのさ、柴崎君てキスしたことある？」
「ないけど・・・・？」
このときだ、この時僕は浅倉さんにキスをされた、人生で始めてのキス、僕のファーストキスは彼女に奪われた
「柴崎君のファーストキスだけ貰っとくね」そう言って彼女は顔を真っ赤にし、涙を流しながらどこかへ走り去っていった
ああ好きな女を泣かしてしまった。僕って最低だ
イジメって何だよ、僕の人生その物を変えてしまうのか？
イジメがなければ、僕は、浅倉さんと付き合えていたのかも知れないけど、自分で振ったんだなのにイジメのせいに、誰か僕じゃに別の人のせいにしたくなる
ちっくしょ、わかんね、わかんねぇよ
「わかんねぇヨ！！！！！！！！！！！」
僕は、叫んだ、目一杯腹に力を入れて叫んだ
「うるせぇな、何がわかんねぇよ！！！だふざけるんじゃねぇぞ。

クソのくせして浅倉さんに告白されて、キスされて調子乗ってんじゃねぇぞ」
木の陰から2年っぽい人がキレて出てきた

ああ、また殴られんだ、また血が出るまで、アザがたくさん出来るまで、殴られて蹴られて、ボコボコにされんだ

ボコスカ殴られている
チクショウ、痛てぇなもっと優しく殴ってくれよ
てかっいっその事殺せよ
僕を、好きな人をも守る自信がない僕を殺してくれよ
もう、頼むから殺してくれ

この時の暴力は激しく僕は結構な間入院することになった
相手は障害罪かなんかで捕まったらしい

「何で、殺すまでやってくれなかったんだよ。
こんな僕を、殺してくれなかったんだよ
僕を、頼むから、誰でもいいから殺してくれ
頼む、僕を殺せぇぇ!!!!!!!!!!!!!!」
僕は、病室で暴れ、叫び怒り狂った
同室の人が、すぐにナースコールを押したから、すぐに医者が来て精神安定剤を打ったらしい
こんな事が、後数十回くらいあったらしいけど僕は、まったく覚えていない
退院後もイジメはもちろん続いた

第一章　第7話　僕と初恋の人と始めてのキスと（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
自分で書いてて思ったんですが、障害罪で捕まるほどの暴力ってどのくらいですかね？
感想、評価、アドバイスよろしくお願いします

第一章　最終話　僕と君への告白と（前書き）

今回クライマックスです（多分）

第一章　最終話　僕と君への告白と

全部思い出した、僕の初恋の人の名前も、顔をも、何で好きになったかも、僕が、浅倉さんを振った理由も、何で浅倉さんの事を忘れていたかも（裕介は、葵を振った後に殴られて病院送りにされたため、
一種の記憶障害で葵との一連のことを忘れていました）僕の本当の気持ちもすべて、思い出した

でも、今の僕は女子恐怖症、女子に触れることもできないし、喋ることすら、苦手だ
そんな、僕でも恋をしていいのだろうか、人を好きになっていいのだろうか
わからないでも、でも
自分の気持ちに素直にならなければ、なんにも始まらないし、終わりもしない
一生この気持ちを背負って行くだけ

聞いてください新曲「素直な気持ち」とかじゃなくて
浅倉さんに葵さんに好きって大好きって伝えなきゃ
今なら言える僕の本当の気持ちを伝えなきゃ

「葵さん、僕は、アナタのことが・・・・・君のことが・・・・・
好きです、大好きです！！！！
だから僕と付き合ってください」
届け僕の本当の、偽りのない気持ち

ーーー葵ーー
「葵さん、僕は、あなたのことが・・・・・君のことが・・・・・

好きです、大好きです！！！！
だから僕と付き合ってください」
・・・・・今の告白だよね？
私がずぅっと聞きたかった言葉

どうしよう嬉しくて涙が出てきそうだよ
緒形君に振られてから、どんだけ悲しくて涙を流したか
でも、今度は緒形君に告白されて、嬉しくて涙が・・・・もう流れはじめている
「どうしたの！？葵さん僕なんか泣かせるような事言った？」
言ったよ緒形君は、君の好き、大好きって言葉が嬉しすぎ涙が出てきたんだよ
言葉が出ないそれほど嬉しい
でも、言わなきゃ私の確かな気持ちを、今思ってる気持ちを緒形君に、裕介君に伝えなきゃ
「私も、裕介君の事が好きです、大好きです。だから・・・・・お付き合いする話はＯＫです」
言った、よし言ったぞ
私の気持ちを言ってやったぞ。ちょっと日本語が変になったけど

ーー裕介ーー
「私も、裕介君の事が好きです、大好きです。だから・・・・・お付き合いする話はＯＫです」

・・・・・やったぁぁぁ！！！！！
葵さんからＯＫも貰ったよ僕
貰っちゃったよ僕
ヤバイ超嬉しい

こういう時って抱きしめたりしたほうがいいのかな？でも、まだ出

来ない・・・・・だけれど葵さんを抱きしめたい

僕の体は勝手に動き葵さんを・・・・・・・抱きしめていた

「裕介君？」

僕、泣いてるんだ嬉しくて、葵さんと付き会えるのが嬉しくて泣いてるんだ

「葵さん、まだ女子恐怖症治ってない僕だけど、これからよろしくお願いします」

僕は、葵さんを抱きしめながら言う

きっと抱きしめながら言うことじゃないと思うけど

「こちらこそ、よろしくお願いします」

こうして、僕達は、恋人になりました（イエーイ）

第一章　最終話　僕と君への告白と（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
予定より一話早かったんですがこれで一章が終了しました
第２章では女子恐怖症の裕介と恋愛初心者葵のぎこちない恋愛を描いていく予定です
感想、評価、アドバイスよろしくお願いします

第二章　第1話　僕と文化祭会議と（前書き）

どうも、こいん０７１２です
第２章（僕の中での）スタートです

第二章　第1話　僕と文化祭会議と

葵さんに告白してから、1ヶ月ぐらいが経った
「祐ちゃーん迎えにきたよ〜」
僕は、葵さんって呼んでるけど、葵さんは僕の事を何故か祐ちゃん
と呼んでいる
始めのほうは恥ずかしかったけど、今では結構慣れてきた

「今行くー」
あれから、僕達の家は案外近いため登下校を一緒にしている
「おはよう、葵さん」
僕は、玄関のドアを開ける
「オハヨ、祐ちゃん」
そして、葵さんは僕の手を掴もうとするけど、いっつも僕がすぐに
振りはらってしまう

「ゴメン、やっぱりまだ触ったりするのはヤダから」
「いいよ気にしないで、でもさいつか、手を繋いで登下校しようね」
「うん・・・いつか出来るように僕も頑張る」
こんな感じで、僕の一日は始まる
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・学校・・・・・・・

葵さんと僕は、クラスが離れている為、昼休み以外は会えない
僕は、どうってことないけど、葵さんは寂しいらしい

「あ～い今から、授業するぞ～～」
気の抜けた感じで教師が入ってきた

僕は、真面目に授業を受けてるけど
周りは、かなりハシャイでいてうるさい
まぁ、仕方ないんだけど

そして、2時間目は数学のはずなのに国語担当の僕達の担任、匂坂（さきさ）
冬至（かとうじ）（男）が入ってきた

この先生は、結構人気があって名前が冬至な為周りからは父ちゃん
って呼ばれている
ちなみに、僕もそう呼んでるけど
父ちゃんは、面白いし優しいから人気があるんだと自分で言っていた

「はいっではこれから、文化祭で何をやるか決めたいと思いま～す」

はっ？文化祭って普通2学期じゃないの？・・・・・・・・・って
今この小説2学期なの！？
夏休みは！？綺麗だねシーズン2とかぶるからなしって酷いぜ！！
まぁ作者の都合上仕方ないか・・・・・・・

「じゃあ、何にするか決めるので、案がある人は手上げてください」
いつの間にか、前に学級委員が出ていて、周りはかなり盛り上がっ
ていた
こういう空気苦手なんだよな僕

「ハイハイ、メイド喫茶」
ある男子が元気よく手を上げた
「死ね！！！」「失せろ」「消えろ！！！」などの女子からの批判
がすごい、そして手を上げた男子は
すっごいブルーな顔をして座った
っかわいそうに・・・・・・・・

「劇とかは？」
クラスの女子が手を上げた
「いいですね！！」
クラスの男子が声をそれえて言い出す
それもそのはず、彼女はこのクラスのマドンナ的存在　香我美京子（かがみきょうこ）
だからだ
クラスの男子はこの子に気に入られようといっつも、この子の言う
事やお願いを聞いている
僕は、まったく興味ないけど

「でも、台本とか誰が作るのよ」
クラスの女子が言い張る
クラスの女子は少数精鋭だけど反香我美京子軍団がいる
彼女もその一人だろう

まったく、何なんだこのクラスは

「それなら、大丈夫です！！！」
クラスの男子が立ち上がった
今立ち上がったのが、僕の友達　河野信二（こうのしんじ）
あいつも、香我美京子信者
っていうか、香我美京子の一言でこんな動くか普通

「どんな、意見ですか河野君」
委員長が聞くと
「緒形裕介君がやってくれると思います。彼、小説を書いたりしているので、結構いい感じのやつが出来ると思います」
小学生の発表っか！・・・・・・って僕！！？？
何で僕がそんなの、やらなきゃいけないんだよ
しかも、自分でやるって言ったんじゃないのに最悪だよ
クラスの男子が僕にやれっていう感じの目つきでスッゴイ睨んでくるし

「やってくれますか緒形君」
委員長が聞いてきた

「普通に嫌ですけど」
僕が、断ると皆今にも殴りかかってきそうな勢いで僕を睨みつけている
でも、やりたくないんだから仕方ないでしょうがよ

「やーれ、やーれ、やーれ」
何か、知らないけど
やれ、やれコールが始まった

うるさいなぁ、仕方ないから適当に書けばいいかクソ面白くない奴を

「わかりました、やりますよ。やればいいんでしょっ！！」
もう最悪だ信二のせいだ
もう、あいつとは絶交じゃい

そして、クラスがかなり盛り上がっている

「では、緒形君よろしくお願いします」

「ありがとう、緒形君」

そう言って香我美さんが、ニッコリこっちを見ていた

「別に・・・・・」

僕は、それを沢尻エ○カ風に返した

でも、どんなストーリーにしよう

・・・・・・・・そうだっ！！信二を恥ずかしいキャラ役にしてやろうっと♪

第二章　第1話　僕と文化祭会議と（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
感想、評価、アドバイスよろしくお願いします

第二章　第2話　僕とお泊まりと

昨日、文化祭があった
僕が考えたのは裸の王様をアレンジしたもので、結構ウケもよかったし、客も結構入っていた
もちろん、裸の王様は信二
こいつを、パン一で皆の前に出して、存分に恥ずかしい想いをさせた
僕は、裏方でスッゴイ笑っていたので皆に少し怒られたりして・・・・・
まぁこんな感じの文化祭でした
ちなみに、葵さんとこの出し物は普通の喫茶店でした

「祐ちゃん、今日私の家来てよ」
はいっ？何故に行かなければいけない
そんな約束した覚えも・・・・・・あった

・・・・・数日前・・・・・・
「ねぇ、ねぇ祐ちゃん、文化祭終わったらさ私の家に泊まりに来てよ」

「うん・・・・・」
この時僕は台本書いてたからうっかり返事しちゃったんだ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ヤバイな、どうしよう断るのもかわいそうだししょうがないか

「いいけど、別のベットで寝ようね？」

「わかってるよ、でも一緒の部屋で寝ようね〜」
よかった、一緒のベットだったらどうしようかと思った

「じゃあ後で葵さんの家に行くから」

「りょかい〜楽しみにしてるね」
葵さん幸せそうな顔をして何処かにいった

さっ僕も一端帰ろうかな
本当はこの後授業があるけど別にいい面倒だし

・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・裕介の家・・・
「お兄ちゃんお帰り今日早やかったね」
美奈が迎えてくれた
なんかこいつの顔を見ると落ち着く

「ただいま、美奈今日、僕友達の家に行くから」

「え〜〜〜〜じゃあ、一緒に寝て貰えないジャン・・・・・寂しいよ」
実は僕・・・・美奈と一緒に寝てるんです
でもそれは、向こうが無理矢理布団に入ってくるわけであって、決して僕の意思ではないんですよ
マジで、僕はシスコンでも、ロリコンでもないけど美奈はブラコンかもしれない・・・・・・
何かヤバイな

「ゴメンな美奈。また今度、お兄ちゃんが遊んでやるか」
僕が美奈の頭を撫でながら言うと

「ホントに？やったーー約束だよお兄ちゃん」
さっきまでションボリしていた美奈がスッゴク明るくなった

「ああ」僕はうなずく

「やったーお兄ちゃんとデートっ♪デートっ♪」
美奈はスキップしながらリビングに行った
何じゃアイツ・・・・・

僕は、自分の部屋でオカシ的なものと、着替え後いろいろな物を鞄に詰め葵さんの家へ行く準備をした

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・葵宅・・・・・・・・・・

「さぁたんと食ってくだせいぃ」
変な喋り方のおっさんがとんかつ定食をご馳走してくれた

「じゃあ、私の部屋行こっか」
僕は黙ってうなずく
正直に言っちゃうと女子の部屋には美奈の部屋にしか入った事がないからかなり緊張して言葉も出なくなっている

「ここが私の部屋で～ス」
僕は目が飛び出しそうになるくらいビックリした
尋常じゃないくらいファンシーな部屋だ
いかにも女の子って感じの部屋
僕がきょろきょろしていると
「あっ」

美奈が好きなわあけのわからないクマの人形を見つけた
「祐ちゃん知ってるの？」

「妹が好きだから」

「可愛いよね、ベディベア」
ベディベアって言うんだあのクマ
何か変な名前！

「何処に座ればいい？」
僕はクマの人形の話を無視した

「え・・・とその辺にでも座ってくれれば」
葵さんがピンク色でハートの形をしたテーブル周辺を指差す

僕は、黙って座る

「何しようか」

「何でもいいけど・・・・・トランプとかあったらマジックとか出来るけどやる？」
こう見えてもマジックは結構得意
えっへん凄いだろ・・・・・・こんなの作者しだいでどうにでも出来るんだけどさ・・・・・

「ホントに！？祐ちゃんマジックできるんだね見せてよ」
この後葵さんにマジックを披露して驚かれました
そして種明かしを無理矢理させられました

そして・・・・・・・・・遊んでいるともう１２時そろそろ寝

ないと肌に悪いわって女かよっ！！
心の中で自分でノリツッコミをする
でも、ホントに美女の皆さんは夜更かししたらダメですよ肌荒れしちゃいますよ～～～ｂｙ作者

「じゃあ、そろそろ寝ようか」葵さんは顔を赤くしながら言っている
何故照れる違う布団で寝るのにまさかっ・・・・・・！

「ゴメン、祐ちゃん今日に限ってお兄ちゃんの友達がとまりに来てあっちが使ってるから一緒のベットで寝なきゃいけないの」

そのまさかだったーーーー！！！！
最悪だ、いくら葵さんだとは言っても相手は女子。女子と一緒の布団で寝るなんて・・・・・・・
最悪だーー！！

でも・・・・仕方ないかもう１１月で結構寒いし掛け布団がないと風邪ひくからな

「わかった」そういうと僕はそっっっと布団に入った
その後葵さんも布団に入ってきた

葵さんを意識しないようにしても意識してしまう
ああ、もう帰りたい
誰か助けてーーもう寝かせてーーでも寝れませえぇん
僕が心の中でふざけていると

そっと葵さんが抱きしめてきた
「ゴメン、祐ちゃん。もう私我慢できないよ
もっと祐ちゃんに触れたいし、抱きしめたいしキスもしたい

だから今日だけでも抱きしめさせて」

そっか僕のせいで葵さんはこんな想いをしてたんだ
最悪だよな僕。彼女にこんな思いさせるなんてホント最悪だ
罪滅ぼしにはならないけど、ここは我慢してこのまま寝よう
葵さんに抱きしめられたまんま寝よう
と思ったけど
ああ、葵さんの体暖かい、気持ちい
意外と嫌でもなくむしろ心地よかった

もしかして女子恐怖症治ったかも！？
この時僕の何かが覚醒した

第二章　第2話　僕とお泊まりと（後書き）

最後まで読んで下さってありがあとうございます
何か文化祭ネタやると見せかけてやらなくてスイマセン
香我美出したかっただけなんす
マジですいません

感想、評価お願いします

第二章　第3話　何でっ！！？？（前書き）

いきなり急展開ですいませぇん

・・・・・・・・・・・・・・調子こいてスイマセン登場人物一同からお詫びもうしあげます

なんじゃこりゃ

第二章　第3話　何でっ！！？？

「緒形君私と付き合って下さい！！」
屋上で、香我美さんに告白されてます
急すぎるやろーって思いましたよね
僕も思ってますよクラスのマドンナに告白されてるんですよ僕
まぁ、僕には葵さんがいるから関係ないけど・・・・・

「ゴメン、僕彼女いるから」

「いいじゃん別に彼女って言ってもたいした子じゃないんでしょ。
その子の１００倍かわいい私と付き合ったほうがいいって」
・・・・・・・・・何この子こんなキャラだっけ、今まで猫かぶってたの？
こんなんがいるから僕は女子恐怖症になったんだな

「ゴメン、僕、君とは付き合えない」

「え～～～私は、緒形君が好きなんだよだから、付き合うって言ってくれるまで手離さないよ」
ひいいいいい女子に手掴まれてるヤバイ死にそう、死なないけど死にそう
僕が死んだら誰か骨拾ってくれ～～～～～～～

「付き合ってくれる気になった？」

「ならないよ」
なるわけないじゃん！！僕には葵さんがいるんだし、いなくてもこんな奴と誰が付き合うかっつぅの

「う～ん・・・・じゃあさキスしようか。そしたら私の事好きになってくれるよね」
ちょっそれはなくね！？マジでヤバイって

ーー葵ーー
さっき祐ちゃん香我美さんにい屋上に呼び出されてたけど大丈夫かな？
やっぱり屋上だったら告白とかだよね
どうしようかな、ちょっと見に行ってみようかな？でも、盗み聞きはよくないよね
どうしよう・・・・・・彼女なんだしそれくらいいっか
屋上に行こうっと

ーー裕介ーー
「キスは辞めとこうよ」
マジでいやだって、まだマトモに葵さんともキス出来てないのに

「いいの、これで緒形君が私を好きになってくれるんだから」
何ですかその自信、キスされても好きにならねぇよ！！てかっキスするなよ

強引に顔を掴まれ、香我美さんの顔が近付いてくる

誰か、誰かヘルプミーーーー。助けてーー

チュっ
僕と香我美さんの唇が重なってしまった
その後、ドンっと物音がした

「祐ちゃんサイテーバカ！アホ！マヌケ！」
葵さんは、何処かに走っていった

「ちょっ葵さん！！」
香我美さんとキスしたのを葵さんに見られたみたいだ
最悪だよ。ホント最悪だーーこの女のせいで

「いいじゃんこれで、私と付き合えるじゃん」

「よくないよ！！」
僕は、香我美さんの腕を振り払い、葵さんを追いかけた

何でこんな事になったんだよ・・・・本当に僕は最低だな、２度も
好きな人にこんな思いさせるなんて

ホント僕はサイテーだ

第二章　第3話　何でっ！！？？（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
今回かなり短めでスイマセン
次回、クライマックスです

後、お気に入り件数が一件増えました。ありがとうございます
感想、評価の方もお願いします

第二章　第４話　やっと・・・・・（前書き）

どうも、こいん０７１２です
お気に入り登録が２件増えたので嬉しいです。
そして、ありがとうございます
感想を頂けたらもっと嬉しいです

第二章　第４話　やっと・・・・・

「待ってよ葵さん！！！」
僕は、校舎の外に走って行った葵さんを追いかけている

「誰が待つか！！このアホっ！！」
ヒドッ・・・・・でも僕はもっと酷いことしたんだもんな

それにしても、葵さん足速いな・・・・・全然追いつかない
差が開くだけのような気がする
チクショ～～僕の足よ、もっと速く走れないのか

ーー葵ーー
祐ちゃんのバカっ！！！浮気するなんて最低だよ
しかも、香我美さんと手繋いでたし、女子に触るの嫌って言うのは嘘だったんだ
ただ、私に触れたくなかっただけなんだ・・・・・祐ちゃんのバカバカバカバカ

「うおおおおおお」
祐ちゃんがもの凄いスピードで追いついてくる
えっ！？自転車ずるくない？ズルすぎでしょ。どうやっても追いつかれるに決まってるじゃないどうしよう？

ーー裕介ーー
よっしゃかなり追いついてきたな、やっぱ自転車は速いぜぇ！！！
えっ？どこから自転車が出て来たかって？
今さっき、廃品回収の所に落ちてた奴、パクった、悪でしょ～～
・・・・・・なんて言ってる暇じゃねぇ～～

ーー葵ーー
ヤバッ久しぶりに走ったから躓いちゃった、このままじゃこける〜〜〜〜

・・・・・・・・・・・・えっ？こけてない何で？
後、お腹に暖かい感触があるんだけど
私は、祐ちゃんにこける前に腕で掴まれていた

「離してよっ」
私は、祐ちゃんの腕を叩く
本当はこんなこと言いたくないのに、本当は祐ちゃんにもっと触れていたいのに
思ってることとは別の言葉がでてしまう

「嫌だ、離さない」
祐ちゃんは、私の腕をギュッと掴む

「何で？祐ちゃんは香我美さんが好きなんでしょ、なのに何で私の事構うのよ」

「違うんだ、違うんだよ葵さん」

「何がちがうのよっ！！」
私は、怒った顔で祐ちゃんを睨みつける

「えっと・・・・・・・・告白されたのは、されたんだけど断ったら腕を掴まれて、そのまま強引にキスされちゃったんだって、こ

んな言い訳してもしかたないか。キスしたのにはかわり無いんだし」

「ホント？ホントにそうなの？」

私が聞くと祐ちゃんは黙って頷く

そうだったんだ・・・・私の勘違いだったってことはかなり私恥ずかしいじゃん、ヤバイ顔かわ火、出そう

ーー裕介ーー

葵さん黙ったままだけど、何考えてるんだろうもしかして、別れようなんて言うんじゃないよね

言われたらどうしよう、・・・・・・

僕が変なこと（エロいことじゃないよ）を考えていると葵さんが口を開く

「ゴメン、祐ちゃん私の勘違いだったみたい。」

「そんな！！謝るのは僕のほうだよ。ゴメン葵さん。ホントにゴメン」

「「・・・・・・・・・・・・」」

二人の間に変な空気が漂う

二人とも無言のまま、１０分ぐらいだ過ぎた

「あのさ祐ちゃん、消毒しようか」

葵さんが口を開く

「消毒って僕、怪我してないんだけど」

「違うよ、変な女（香我美）にキスされたから、キスして消毒しようってこと」
えっそんな・・・・・恥ずかしくない？
でも、葵さんまだ顔怒ってるしな
僕が考えていると、葵さんが僕の肩に手を置き背伸びしながら強引にキスをしてきた

「！！！」
僕は驚いたまんま
葵さんは舌を僕の口の中に入れてくる
そして、舌を絡めてきた
ああ、なんか気持ちいな。もっとキスしたい、葵さんに触れたい葵さんを、抱きしめたい僕は、そんなことを思っていた

僕も、葵さんの舌に舌を絡める
「気持ちよかったね♪。私ディープキスなんて始めてしたよ」
葵さんが顔を赤くしながら言っている

ガバッこの変な擬音と供に葵さんを抱きしめた

「葵さん・・・・・・大好き♪」

「祐ちゃん大丈夫なの・・・・・・？」
そういえば、葵さんとキスをして、触れても抱きしめても、全然嫌じゃない、むしろ嬉しい（ちょっと表現が変だけど）
もしかしたら、女子恐怖症治った！？

「・・・・・大丈夫みたい」

「そっか、よかった。これで祐ちゃんと手も繋げるし一緒にいろんな事、出来るね♪」

「やっと、やっと葵さんに触れられる。これも、あの変な女のおかげかなな？（笑）」

「かもね（笑）」

葵さんが笑顔で答えてくれた

「葵さん、学校このままサボっちゃう？」

「そうだね、サボっちゃおうか。鞄は明日休みだから取りに行けばいいしね」

今日は、金曜日デース

「私、祐ちゃんの家に行きたいなーー」

「えっ、何もないとこだよ？」

はっきり言って僕の部屋にはゲームしかないんですが

「それでもいいの。ほらっ！祐ちゃんの家行こっ」

「う、うん」

僕達は、手を繋いで僕の家に向った

今日、美奈いたっけ？出来ればいないでくれ。居たら葵さんに何するかわからないし

あいつ、に彼女できたって言ったら相当キレてたし何でかはわからないけど

第二章　第４話　やっと・・・・・（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
やっと、女子恐怖症が治った？裕介の性格が次回から徐々に変わっていきます
今でも充分最初の頃からだと変わってますが（笑）
そして次回、美奈ＶＳ葵
お楽しみに～

感想、評価、お気に入り登録もお願いしまーす

・・・・・・・・・・・・・・・このあとがき最低だな

第二章　第5話　　美奈ＶＳ葵（前書き）

どうも、こいん０７１２です
お気に入り登録１件増えて、７件になりました
嬉しいです。嬉しい限りです
感想のほうも１件あったので嬉しかったです
ありがとうございます
これからも、「女子恐怖症＋ヒーロー気取りな奴＝僕」をよろしく
お願いします

第二章　第5話　　美奈ＶＳ葵

「おじゃましま～す」　「ただいま」
僕と葵さんが家に入ると美奈が走ってくる
やっぱり居たか、小学校は終わるの早いからな

「お帰り、お兄ちゃん！！・・・・・誰その人」
美奈は、葵さんを指差している

「え・・・・と、僕の彼女の浅倉葵さん」
僕が紹介すると

「お兄ちゃんは私のものなんだからねっ！！勘違いしないでよ！！」
と、怒鳴る美奈
僕はお前のものじゃねぇよ

「ふふっ可愛い妹さんだね」
葵さんは美奈の頭を撫でる
頭を撫でる葵さんも可愛いなチクショー

「ちょっ、何触ってんのよ。私に触っていいのはお兄ちゃんだけなんだから」

「そうなんだ。ゴメンね。えっと名前は・・・・」

そっかまだ言ってなかったけな
僕が言おうとすると

「私は、緒形美奈よ！！」

と、また怒鳴る美奈

「そっか、ゴメンね美奈ちゃん」
それを、右から左に受け流す葵さん

「とりあえず、上がってよ」

「うん♪」

「こっち」

自分の部屋に葵さんを案内する

ーー葵ーー
ああ、男の子の部屋に入るの初めてだから緊張するなぁ・・・・・
お兄ちゃんの部屋には入った事あるけど

それにしても・・・・・美奈ちゃんがスッゴイ目でこっちを睨みながら付いて来てるんですけど、若干恐いな。でも、美奈ちゃんとも仲良くならなきゃ！！でも、自信はないなだってあんなに嫌われてるんだもん
でも、頑張らないと！！

「ここだから、入って待っといてよ飲み物持ってくるからさ」
祐ちゃんが、ドアを開けながら言う
私は、さっと入りテレビの前に勝手に座った

「「は～い」」
私と美奈ちゃんが声をそろえて言う
何で美奈ちゃんまでいるの！・・・・・・私と祐ちゃんのラブラブ

タイムがって何、考えてんだ私
それにしても、祐ちゃんの部屋、ゲームがいっぱいあるんですけど！！
てかっゲームしかないし、漫画とかはあるけど、部屋の９割がゲームって感じ
里香が、ゲームが得意で、好きって言ってたけどこれ程とは、祐ちゃん恐るべしっ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・美奈ちゃんにまだ、睨まれてるんですけど、スッゴイ威圧感だし
この子将来、凄い子になりそう

私が変なこと（エロいことじゃないよ）を考えていると、祐ちゃんがドアを開けジュースを持ってきてくれた

「お待たせ」
祐ちゃんは、ジュースをこぼさぬ様に腰をゆっくりおろし机の上におぼんを置いた
机は、私のハート型のとは違ってシンプルで長方形の木の机
おぼんには、コーラ×３とスナック菓子が乗っている

「葵さん、炭酸大丈夫だよね」

「うん、全然大丈夫」
私、炭酸苦手だったんだけど、祐ちゃんが炭酸好きだから、私、炭酸嫌い克服しましたーー！！
どうよ、このラブパワー、凄くない？？

「葵さん・・・・何したい？ゲームしかないけど」

「ゲームしかないんだったら、ゲームしか出来ないでしょ」
「そうだけど・・・・・・あっ何か好きなジャンルある？僕がオススメするやつやろうよ」
「んーーーーーー格闘かな」
私がそう言うと、祐ちゃんはゲームを置いてある棚をあさりだした
「格ゲーだったらこれがオススメだよ」
祐ちゃんが、ゲーム機に入れながら言う
「私もやるーーーー」
ここで、美奈ちゃんがコントローラーを持っての登場
「僕はいいけど・・・・葵さんが」
私の方をちらっと見る祐ちゃん
「私もいいよ。大勢でやった方が楽しいしね♪」
それに、美奈ちゃんと仲良くなるチャンスだし
「えっと操作はね・・・・・」
「このゲームの操作なら私知ってるよ、良くお兄ちゃんとやってるから」
私、結構自信あるんだっへっへっへ
「私、このキャラにしようっと」

「じゃあ、私は、このキャラにしようっと」

「ファイト」
合図と同時に、戦いが始まる

まず、弱攻撃
よしっヒット
次は・・・・ガード、この後に強攻撃！！
その後いろいろ、あって勝ちました

「あーー結構自信あったのに～～～」
と、寝ころびながら、足をバタバタさして悔る美奈ちゃん

はっしまった。あまりにも夢中になって本気をだしてしまった
まぁ仕方ないよねゲームは本気でやるもんだし
でも・・・・大人気ないよな私
心の中で反省しなきゃねっテへっ♪

「じゃあ、次は僕が相手だね」

「キャラは・・・・こいつでいいかな」

私は、さっきと一緒のキャラを使う

「ファイト」
合図と同時に戦闘開始

まず、先制攻撃！！
そして、必殺技

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

あっさり勝てたんだけど、、あれっ？祐ちゃんもうちょっと強いと
思ってたんだけどな
全然弱かった
私が強すぎるだけか

「やっぱり、本気でやらなきゃダメだね。ノーマルコントローラー
じゃやりにくいや。美奈スティック持ってきて」

「了〜解」
美奈ちゃんは、走って一階に下りていった

えっ！？本気じゃないって、そりゃ私が勝ててもおかしくないか
でも、スティックってどんだけ熟練者なのよ
やっぱい勝てるかな？？？？

「持って来たよお兄ちゃん」

「ありがとな。美奈」
祐ちゃんが美奈ちゃんの頭を撫でている
ああ、私も撫でられたい・・・・・・

「よしっ次はてかげんしないぞっ！！」
指をポキポキならしながら言ってる祐ちゃんマジカッコいい

「ファイト」

先制攻撃ってかわされた？？
それに、何この攻撃全然ガードも出来ないし、かわせない
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
負けたしかも、パーフェクトで
やっぱり、裕ちゃんゲームウマいんだな

「よしっ次は、私が葵ちゃんにチャレンジだッ！！」
今、美奈ちゃんに名前で呼ばれた嬉しい！♪
これで、ちょっとは距離縮まったかな

——裕介——

「裕ちゃんバイバーイ」

「うん、また明日ねぇ」
僕は、手を振りながら、見送った
そして、晩御飯の用意をしにキッチンへと向おうとすると、美奈がくっついてきた

「お兄ちゃんさぁ私の事好き？？（女として）」

「何でいきなりそんな事聞くのさ」

「いいから、答えてよ」

「もちろん好きだよ。美奈可愛いし（妹として）」

「ホントに？やったーーじゃあ、私も葵ちゃんと、一緒くらいす好きなんだね

でもこれ、二股にならないのかな？」

はっ？いきなり何言い出すのさ、美奈は・・・・・・・・・・

僕が彼女として認めるのは葵さんだけだっつぅの

美奈は妹として好きって言ったつもりだったけどなぁ

勘違いしてるなこいつ

まぁいっか。説明するの面倒だし

それにしても、美奈がブラコンなのは今回で確定だな・・・・・・うん

第二章　第5話　　美奈ＶＳ葵（後書き）

最後まだ読んで下さってありがとうございます

・・・・・・・・どんどん美奈の性格がブットンでいくーーーーーー

どうすればいいんだ、このまま行くしかないのか？

いくしかないのか？？

イクしかないんだーー！！！

第二章　第６話　ブラコンな姉登場！！（前書き）

どうも、こいん０７１２です
お気に入り登録が１件増えて８件になりました～～
ありがとう、ございます
お気に入り登録が増えるたび嬉しいです

ではっ本編へ～～

第二章　第6話　ブラコンな姉登場！！

「怒られちゃったね」
笑いながら言ってる葵さん
そりゃそうだろう、学校をサボったのだから
昨日、鞄を持って帰ってなかった為、取りにいくと生徒指導の若松(わかまつ)に見つかり、2時間くらい説教された、僕は聞いてなかったけど葵さんはどうなのかな？

「葵さん、これからどうする？デートする？それとも、帰る？」

「裕ちゃんの口からデートなんて言葉が出てきて嬉しい！！」
葵さんが抱きついてくる

「そ、そうかな？」
女子恐怖症が治ったとはいえど少し動揺してしまう

「そうだよ。だって、いっつも私が誘ってたもん」

「で、デートするの？しないの？」
ちょっと意地悪してみたりして

「するする」
高速で首を縦に振る葵さん
可愛いなぁ～

「じゃあ、どこ集合にしようか」

「また、駅前のゲーセンでいいんじゃない？」

葵さんまだ抱きついてるし
ちょっくっつき過ぎじゃない？？

「わかった。準備できたらゲーセンに行くね」

「うん♪早めに来てネーー」

おもいっきり手を振りながら走っていく葵さん
よっぽど、僕とデートするのが嬉しいのかな？
自意識過剰すぎるか・・・・・・・・

「さっ僕も帰ろう」
背伸びをしながら言う僕

「ただいま、美奈」

「お帰り、兄ちゃん。今日、お姉ちゃんが来てるよ」

・・・・・・マジで！！
何この急展開！！
感想にも書いてあったけど、この小説展開が急すぎるって！！！！！！
ああ、千佳が帰ってきたのかよ。最悪だーー！！
千佳（ちか）っていうのは去年、就職して一人暮らしを始めた、実の姉なんだけど
「祐と離れるのは嫌だけどお母さんに迷惑かけられないよ」とか言

って、出て行ったけど本当は一人暮らしがしたかっただけだと思う
僕が何故、千佳が嫌いかと言うと・・・・・・・

「おお！！帰ってきたか、私の愛しの弟よ」
千佳が抱きついてくる

「お姉ちゃんズルイーー私も！！」
美奈もくっついてくる

「おっ美奈もブラコンに目覚めたか。でも、仕方ないよな、祐こんなに可愛いんだもん」

「違うよ！お兄ちゃんはカッコいいの」
こんな感じで千佳は美奈以上のブラコンなんです
もう、うっとうしいったらありゃしない

「祐、好きだー」

「お兄ちゃん大好きだー」

「ちょっと、美奈！私のほうが祐の事好きなんだからな」

「何言ってんのお姉ちゃん私に決まってるジャン」

「私だよ」

「私」

「私だよ」

「私！！」

何だこいつら。バカの集団じゃないか
まぁ、美奈はいいとして、千佳を止めないと

「やめろよ、千佳。お前、もう社会人だろ」
そう、千佳はもう２３歳のＯＬ
こんな事していい歳ではないだろ・・・・・・・・・

「何だその口のききかたは、そんな祐にはキスしちゃうぞーー」

「ちょっおまっ止めろって」
チュっ

・・・・・・・・・・・・本当にやりやがった
まぁ、ホッペだから許すけど、唇だったら葵さんになんて言われるか
また、怒られるよ

「よし！祐、遊びに行くぞ。てかっホテル行こっホテル」

何言ってんだこのバカは
弟に欲情すんなっつぅの

「いや～～私彼氏いないから欲求不満でさぁ」

「千佳、美奈も居るんだからそういう話は止めろよ。」
普通は小５の前でそんな話しなけどな
するのは、このバカくらいだろ

「ゴメン。ゴメン。じゃあ、遊びに行くか」

「無理だよ。今日、友達と遊びに行くんだから」
「何っ！！誰だそいつは、今から私がそいつのとこ行って半殺しにしてやる」
「言うわけないだろっ！！」
このバカならやりかねない
何せレディースの総長だった女だ
「どうせ、葵ちゃんでしょ」
美奈が言う
ちょっ言ったらだめだろ美奈
葵さんが半殺しにされてしまう
されなくても、絶対このバカは変なことするから
「葵ちゃん？誰だそれは」
千佳がすっげぇ睨んでくるし
「お兄ちゃんの彼女だよ」
美奈ーー止めてくれ、それ以上言うのは止めてくれーー！
「なにぃ？彼女だぁ？私という存在がありながら、この浮気ものーーー」
千佳の鉄拳が僕の腹に突き刺さる
マジで、突き刺さってるような感覚
「グボファ」
こいつのは、マジで痛い

鉄の鉛球が飛んだきたぐらい痛い（そんなことまずないけど）

「ヤッホーー裕ちゃん。直接来ちゃったって・・・・・何で倒れてるの裕ちゃん？」

ここで、葵さんが登場だーー
なんというバットタイミング
ヤバイ葵さんがやられる

僕は立ち上がった

「葵さん、いらっしゃい。とりあえず僕の部屋、行こう」

「う、うん」
僕は、葵さんの手を引っ張り2階に連れて行こうとすると

「ちょっと待ったぁ。あなた、祐とはどんあ関係なの？詳しく聞かせて頂戴」
またバカなこと言い出したよこいつ
もう、頼むからほっといてくれよ

「別にどんな人と付き合おうが僕の勝手だろ」

「まぁ、そうなんだけど。姉として祐がどんな子と付き合ってるか知りたいからさ」

「そういうことならいいけど・・・・・・葵さんは？」

僕が聞くと葵さんは少し驚いてる顔で頷いている

そして、僕達はリビングのテーブルに座った
なんかの面接みたいな空気になってるし
ホントにウザいな千佳は
はぁ～何で帰ってきたんだろこいつ

「じゃあ、今から、質問させてもらうね」
何か嫌な予感がする・・・・・

第二章　第6話　ブラコンな姉登場！！（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

また、ブットンだキャラが出てきてしまいました
千佳はおしとやかな姉というキャラで出そうと思ってたのに
こんな、ブットンだキャラになってしまいました

こんな、姉妹が二人も居て裕介もかわいそうですね
まぁ、書いてるのは僕なんですが（笑）

感想、評価、お気に入り登録お願いしま～す

第二章　第7話　ずっと一緒に（前書き）

どうも、こいん０７１２です
お気に入り登録１件増えて、９件になりました
１０件目指して頑張りたいと思いますので応援お願いいたします

関係ない話なんですが、このごろ喧嘩番長４にはまってます
本当に関係なくてスイマセン
ではっ女子恐怖症＋ヒーロー気取りな奴＝僕お楽しみください

第二章　第7話　ずっと一緒に

「じゃあ、今から質問するね」

「・・・・・その前に一ついいですか？」

手を挙げながら言う葵さん

「何？」

「失礼なんですけど、あなた誰ですか？」

「葵さん、あいつ、僕の姉で千佳って言うんだ」

「そうなんだ・・・・すいません千佳さん。ホントに誰だかわからなかったもので。」

葵さんは頭下げてるけど・・・・・・

千佳を見ると鬼のような顔をしている

うわぁーーマジでキレてるよあの顔は、まぁ、自己紹介じなかったあいつも悪いからな

「今回は特別に許してあげる。で、最初の質問はあなた達付き合い初めてから、どのくらい経った？」

おっ千佳にしては、真面目な質問だな。もしかしたら、何も起こらないかも

しかし、何で美奈はあんな面白がってそうな顔してんの？

あいつ、ホントにムカツクなぁ

「2ヶ月くらい」

僕は短い言葉で答える

ーー千佳ーー

2ヶ月かぁ、それならエッチしてても、おかしくないな・・・・・・・・・・

あれっちょっと待てよ、祐ってたしか女子恐怖症だよな、なのに何で彼女がいるんだ？もしかして治ったのか？

ーー裕介ーー

「祐ってさ女子恐怖症だったよね」

「まぁ」

「なのに、何で彼女が居るわけ？」

「治った」

もう、葵さんに触れるし触れていても嫌じゃないから大丈夫だと思うけど・・・・・・

「そっか、よかったね。でさ、二人ってもうエッチしたの？」

「だからぁ、美奈もいるからそういう事は言うなって！！てかっいなくても普通そういうのは言わないでしょ！」

僕は、机をバンッと叩き立ち上がる

机を叩いた手、痛ってマジで痛い

家の机こんなに硬かったか？

やっぱり、千佳に普通を期待した僕がバカだった

そりゃ、そうか千佳は普通じゃないもんな

「ゴメンね葵さん。もうこんなのほっといて上、行こう」
僕が、そう言いながら葵さんの方を向くと顔を真っ赤にしている
「葵さん？」

ーー葵ーー
エッチってえっ？
私は、その言葉を聞くと急に恥ずかしくなってきた
そんな、こと裕ちゃんとするなんて考えた事もないし、したいとも思わなかったから余計に恥ずかしいし、急に言われたからビックリした
裕ちゃんはエッチしたいのかな？
でも、女子恐怖症が治ったばっかだしそれは、ないか
あ～～～千佳さんが変なこと言うから頭がおかしくなってきちゃったよ～～
「葵さん？」

裕ちゃんの言葉で私の頭が普通に戻る

ーー千佳ーー
あら、この子も意外と純情なんじゃない
この子なら、祐にピッタリかもね。私の元から祐が離れるのは寂しいけど

ーー裕介ーー
「葵さん。僕の部屋行こっ？」

「う、うん」
僕は、葵さんの手を引っ張り階段を上っていく

そして、ドアを開け自分の部屋に入る

「ゴメンね葵さん」

「裕ちゃんのせいじゃないから大丈夫だよ。」
葵さんの顔が、赤くなっている

「「・・・・・・・・」」
千佳が変な話をするもんだから、意識してしまって気まずくなってきた

「ゲームでもしよっか」
この空気に耐えれなくなったので、ゲームをしてごまかそうと思い言ったのだが、葵さんは首を横に振る

「？」
僕が首をかしげていると

「キスしていい？」
葵さんが僕に近付いてきた
そして、上目使いで僕を見る

その顔はズルイ、葵さんにそんな目で見られたらなんでもしてしまう

「いいよ」
僕がそっと目を閉じる
・・・・・葵さんの唇がそっと重なるのを感じる
キスしたまま、時間が過ぎていく
キスしてからどのくらい経ったのだろうか１０秒？２０秒？１分？
わからない。目を閉じてるから時計は見れないし、数も数えていない

このまま、時間が止まればいいのに
僕は、それだけを心の中で思っていた

「お兄ちゃん！！どうせゲームしてるんでしょ私も入れてよ」
美奈が急に僕の部屋のドアを開ける

「「！！！

「ヒーロー？」

「うん。どんな時でも、いつでもピンチになった助けに来てくれるヒーロー」

「信じるも何も私の目の前にいるからねヒーローは」

「？」

「裕ちゃんだよ。私にとって思うけど裕ちゃんはヒーローなの。どんなにピンチでも助けに来てくれるヒーローなの」

裕ちゃんは、私を2回助けてくれた、先輩に絡まれた時とナンパされたとき

私には裕ちゃんがヒーローに見えた

大ピンチから救ってくれたヒーローに

「弱いけどね」

裕ちゃんの一言で私達は笑う

さっきまでの、変な空気からは一変して明るい空気になった

助けてもらっただけじゃなくて、裕ちゃんといると元気を貰える

そういう意味でも私にとっても裕ちゃんはヒーローなんだな

「裕ちゃん！！」

「どうしたのさ、そんな大きな声で」

「ずっと、一緒にいようね♪」

「・・・・・・・・」

裕ちゃんは照れて黙ってるけど私にはわかるよ

背中から伝わってるよ、裕ちゃん

「うん」って言ってくれてるんだね
嬉しい♪
今、ホントに裕ちゃんのこと好きでよかったって思ってる
中学生の時から引っ張ってきたけど、その恋がようやく叶ったんだもんね
本当に裕ちゃんが好きだなぁ私、世界の誰より、自分より
裕ちゃん、ずっと、ずっと一緒にいようね♪

届いたかな？この、二人の背中を通じて私の気持ちが

第二章　第7話　ずっと一緒に（後書き）

・・・・・何か最終回、みたいな話になってしまった
サブタイトルも最終回っぽい・・・・・・・・・
心配しないでくださいね。まだ終わりませんから（汗）
それにしても、今回の話では裕介と葵、ラブラブですねぇ～
まぁ、もっとラブラブにするつもりなんですが（意味わからん）

感想、評価、お気に入り登録お願いしま～す

第二章　第8話　嫉妬（1）

ジリリリリリ
かなりウルサイ目覚ましを止めて、ベットの上で伸びをする
「もう朝か・・・」

昨日準備をしていた鞄を持ち、階段を下りていく

ああ、まだ眠たい
昨日は、美奈と徹夜でゲームしてたからな
はぁ～何で徹夜でゲームなんかやったんだろ

「おはよう、美奈」
美奈は僕より起きるのがかなり早いので、大抵僕が一階に行く時にはいる

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう、祐」

・・・・・・・あれっ？まだ、寝ぼけてるのかな僕、千佳の姿が見えるんだけど。あいつ、もう帰ったんじゃないの、昨日葵さんが帰った後に帰って行ったし

僕は、手で目をこすり、もう一度見てみる

やっぱり、千佳がいる
「何で、千佳がいるの？昨日、帰ったんじゃ・・・」

「私、今日からここに住むから。昨日は荷物取りに帰っただけ」

マジッすか！？

はぁ～何で朝からこんなブルーにならなきゃいけないんだよ
今日から、家には千佳がいるんだもんな～
どうしよう、僕が一人暮らし、しようかな？でも、バイト代だけじゃ無理か・・・・・・・
（裕介は一応、週３でバイトしています）

僕は、そんなことを考えながら登校していた
今日は、葵さんは一緒に行けないとのことで、一人で登校しています
いっつも、テンションが高い葵さんと登校していたので、いなかったら寂しかったりして
この事、葵さんに言うと喜ぶだろうな

・・・・・・・

・・・

「あのさ緒形、さっき葵が男子と楽しそうに歩いてたけど、いいの？」

「いいんじゃない、誰といようが葵さんの勝手だし」

「あっそ・・・・まぁ浮気されないように気よつけな」

そう言って小林さんは何処かに行った

浮気って・・・葵さんに限って大丈夫だよな？

あれっ？葵さんを信用しないわけじゃないけど、不安になってきた

それに、何だろこのモヤモヤした感じ、何かはわからないけど心が変だ

・・・・・まっ寝れば治るでしょ

そう思い僕は寝た（学校の中だけど）

・・・・・・・放課後・・・・・・・・・・

葵さんの教室に行くか（一緒に帰ろうと誘いに）

僕が、廊下を歩いてると葵さんが歩いて来た

誰だろ？横に誰かいるけど・・・・小林さんが言ってた男子だな多分

僕は、さっと隠れて二人の様子を見ることにした

結構、楽しそうにしてるけど・・・・葵さんも笑ってるし

あれっ？何で、葵さん照れてれてるの？普通に喋ってたら、照れる事なんてあんまりないはずなんだけど

また、変にモヤモヤしてきた。一体、何なんだこれは、葵さんがほかの男子と楽しそうにしている所を見てたら、急に胸が苦しくなってきた
何か心がチクチクしてモヤモヤの様な言葉では表現できない
とにかく、帰ろう
もう、これ以上見てられない
これ以上見てたら胸が破裂しそうだ

・・・・・・裕介宅・・・・・・
もしかして、僕はあの男子に向って嫉妬しているのだろうか
だから、胸が苦しくなったりモヤモヤするのだろうか
わからない、わからない
もう、何がなんだかわからない

僕がベットで足をジタバタさせてると

ピロリィ～ン♪
携帯の着メロがった

葵さんからだ

「今から、裕ちゃんの家行っていい？」
との、ことだった

今、会うのは正直、嫌だ。でも葵さんに会いたい
言ってる事は無茶苦茶だけど、葵さんに会いたい

「いいよ」

僕は、そう返信した
１０分後

ピンポ～ン♪
インターホンが鳴った
葵さんだ

「いらしゃい」
僕は、ドアを開け葵さんを家にあげた
葵さんの笑ってる顔を見ると少し、心のモヤモヤがなくなった気がした

「おじゃまします～す」

「じゃあ、僕の部屋行こうか」

「うん」

僕達は、階段を上る
今すぐ、葵さんに触れたい、抱きつきたい
何故か僕はそんなことを思っていた

今すぐ、葵さんにキスしたい・・・・

僕達は、部屋に入る

バタンっ
ドアが閉まった

「裕ちゃん！？」

僕は、おもいっきり葵さんを後ろから抱きしめた

第二章　第8話　嫉妬（1）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます次回で第2章終了です第3章では、裕介が大変な事に！？裕介と葵の絆が・・・・・・・・第三章お楽しみに！！　感想、お気に入り登録、評価お願いします

第二章　最終話　嫉妬（２）（前書き）

どうも、こいん０７１２です
今回、裕介がヤバイです（いろんな意味で）

第二章　最終話　嫉妬（2）

僕達は、階段を上る
今すぐ、葵さんに触れたい、抱きつきたい、抱きしめたい
何故か僕はそんなことを思っていた

今すぐ、葵さんにキスしたい・・・・

僕達は、部屋に入る

バタンっ
ドアが閉まった

「裕ちゃん！？」

僕は、おもいっきり葵さんを後ろから抱きしめた
そして、ベットの上に押し倒す

「葵さん、今日一緒にいた、男誰？」

「誰って・・っん！！」

葵さんの耳をアマガミする
そして、手を胸の位置に持っていく

「ちょっ裕ちゃん！？」
葵さんが、顔を真っ赤にして驚いている

「誰なの？」

僕は、冷静な顔で聞く

「友達だよ・・・・・男友達ぐらい一人ぐらい、いるでしょ」

「ホンとに？」

僕は、葵さんの胸を触りながら聞いている

もう、今の僕には理性がない

葵さんをメチャクチャにしたい

「ホントだよ・・・ふぁっ」

「どうしちゃったの？裕ちゃんなんか変だよ」

確かに変かもしれない

というか変だと自分でも思う

でも、自分を制御できない

僕の体が、あの男に対する嫉妬が無くなるまで、葵さんを求めている

「葵さん、大好き・・・」

そう言って、葵さんにキスをする

初めて自分からするディープキス

そして、口の中で舌を絡ませ合う

「裕ちゃん・・・・や・めっ・て」

何で？何で葵さんは僕を拒絶するんだ

あの男とは楽しく話していたのに

何で僕はっ！！

「止めないよ。葵さんともっと触れていたいから」

「だったら、抱きつくだけでいいじゃない。何でこんな事するの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ーー葵ーー

「・・・・・・・・・・・・・・」

何か今の裕ちゃん恐いよ・・・・・・恐い

ホントに何でこんなことするの？

「あんっ！！」

変な声出ちゃったし

ああ、どうしようこのまま最後までイクのかな？

「葵さんの感じてる声可愛い」

「感じてなんか・・っん！」

「感じてるじゃん」

裕ちゃんが胸を触りながら言ってくる

「イジワル・・・・っはぁ！」

気持ちいいけど、こんな形で最後までいきたくないよ

もっと、ちゃんとした形でやりたかった

裕ちゃんだからこそ、ちゃんとやりたかった

「どうしたら・・・・・許してくれ・・・るの？」

悲しくて、ウマイように話せないよ

「・・・・・・・葵さんが僕を拒絶しないでくれるなら」

えっ？私、いつそんな事した？

私が、裕ちゃんを拒絶するなんてありえないよ
こんなことされても私、裕ちゃんの事好きだし
でも、許してくれるんなら
「わかった。もう、拒絶しないから許して。エッチはまた今度ちゃんとやろう？」
裕ちゃんの動きが止まった
そして、裕ちゃんが口を開く
「後僕、以外の男と出来る限り会わないで。僕、捨てられんじゃないって、嫌われるんじゃないんかって不安になる」
裕ちゃんは、大粒の涙を流した
服が乱れてる私の耳元で「ゴメン」とささやき、私を抱きしめる
私を抱きしめた裕ちゃんは、いつもの裕ちゃんに戻っていた
全然、恐くない、優しくてあったかい裕ちゃんに
「心配しなくていいよ。私は裕ちゃんを捨てたりしないよ。嫌いになったりしないよ。
だから、安心して？後、出来るだけ、だけどほかの男の人にも会わないから」
私は、そっと裕ちゃんを抱きしめる
裕ちゃんにそんな思いさせてたんだ私・・・・・・
何で、私が男子と楽しそうにしてたって知ってるんだろう？
そんなことは、どうでもいっか
裕ちゃんも理解してくれたし
「うん・・・・ゴメンわがままな僕で」

「いいよ。でも今回のはちょっとやり過ぎだったかな？」

「ゴメン・・・・・ホントにゴメン。よく考えれば葵さんが僕を捨てるわけないよね（何この自信）
葵さんが、ほかの男と楽しそうにしてる所を見てると、嫉妬したというか・・・胸が苦しくなって
マトモなこと考えれなくなって・・・こんな馬鹿なこと考えてたみたい・・・葵さん本当にゴメン」

私を抱きしめてたまま、裕ちゃんはまた涙を流した

えっ！！ちょっと意地悪で言っただけなんだけど・・・・・裕ちゃんがこんな感じになるなんて

「ううん、もういいの。裕ちゃんが元に戻ってくれたし」

「葵さん・・・・・・・大好きだよ」

「裕ちゃん、私も大好き♪」

私達は、キスをした
さっき裕ちゃんにされたキスより、二人分の愛がこもったキスを
多分、3分くらいしてたと思う

「今日、裕ちゃんの家泊まっていこうかな～～」
何、私急に言ってんの？

「いいよ、泊まっていって。明日、土曜日だし」

「じゃあ、泊まってくね。このまま、家に帰らないでもいいかな？」
「いいよ。パジャマは僕の貸してあげるし少し大きいけど。それに、葵さんと離れたくない」
「私も」
また、私達は抱き合う
裕ちゃんが上にいるから少し重いけど
「裕ちゃん、服着ていい？」
まだ、裕ちゃんに脱がされた服は着ていなかった
タイミングがなかなか、なかったから
「うん」
裕ちゃんは照れた顔で頷きながら言った
脱がしておいて何を今更
そして、服を着ていると裕ちゃんがこっちをジロジロ見ていた
「裕ちゃんのエッチ」
私が冗談で言うと
「ご、ゴメン」
と言いいながら、背中を私に向けた
何で、あそこまでしておいて、ここまで純情なんだろう？
裕ちゃんって不思議だな～～
「さっ服も着たし、ゲームでもしよっか」

「じゃあ、この前の格ゲーやる？」

「うん！！よーし今度は負けないもんね！」

私達は思いもしなかったこの幸せがあの人達によって壊されるなんて・・・・・

第三章へ続く

第二章　最終話　嫉妬（2）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

何か、今回の話は、ただのエロだったような気がしますね

多分、こういう話は今回だけだと思います

次回からは第三章に突入するので、楽しみにしておいてください！！

感想、評価、お気に入り登録、お願いしま～す

最終章　第1話　転校生（前書き）

どうも、こいん０７１２です
今回から、最終章始まります

最終章　第1話　転校生

「葵さん、今日も可愛いね」
今、葵さんと手を繋ぎながら登校している

「何、言ってるのよ。・・・でも、嬉しいありがとう」
何か、葵さんを襲ったときから僕はかなり大胆になっていた
何故か、さっき言ったようなセリフもすぐに出てきてしまう

「今日も、一緒に帰ろうね」

「うん、でも今日はちょっと学食かどこかで待っていてくれないかな？ちょっと、やる事があるからさ」

葵さんはもうしわけなさそうな顔で言っている
別にいいのに
今の僕は葵さんの為だったら何でも出来そうだ

「じゃあ、学食でうどんでも食べて待ってるよ」

「ありがと」
葵さんは、僕の顔の前で微笑みながら言った

やっぱり葵さんは可愛いな～～
笑ってる葵さんは特に
今すぐにでも、抱きしめてキスしたいけど、もう校門の前そんなこと出来るわけない
はぁ～時間って経つの早いな
つくづく思う僕

「じゃあね、私こっちだから」

「うん、また後で」
僕と葵さんは違うクラスで校舎も違うから校門でいつも別れる
前に言ったと思うけど、昼休みにしか会えないのは葵さんもそうだけど、僕も寂しくなってきた

僕は、普通に教室に入る
「おはよう、緒形」
話しかけてきたのは、小林さんだ

「おはよう」
彼女とは、まぁまぁ仲が良くなった様な気がする
でも、プライベートで遊んだりとかではなく、普通に学校で話ししたりするだけの関係

「おはよう、信二」

「・・・・・・・・・・・・・・」
今日も、無視されたか
前までは、クラスだけだったけど、今は学年全体から無視されるようになった。女子からも
まぁ、別に気にしてないけど、葵さんといれれば問題ないし

「はいっ今日は転校生がやってきまーす」
いきなり入ってきて、言い出す父ちゃん

「マジで、ねっ父ちゃん女？女？」
と盛り上がる男子

「父ちゃん、男？」
と盛り上がる女子

僕から見ると、どっちもウザい
転校生なんてどっちでもいいじゃないか

「はい、転校生の上山浩二（かみやまこうじ）君でース」
上山浩二、聞いた事ある名前なんですけど・・・・
この時、僕の体が震えた
もう、あんな思いはしたくない
僕は、心の中で叫んだ

「緒形、大丈夫？顔色すっごく悪いけど」
隣の席の小林さんが僕に話しかける

「うん、多分大丈夫」

「そう、何かあったら言ってね。私一応、保険委員だから」

「うん」

上山浩二は、中学の時僕を虐めてた奴だ
特にあいつの暴力は酷く、毎日のように僕はあいつに殴られていた
嫌だ、もうあんな、思いしたくない
どうか、僕に気付かないでくれ

「キャ～～カッコいい！！」
女子の黄色い悲鳴が凄い
確かにあいつはカッコいいという部類に入るだろう

見た目は金髪のオールバックでピアスに強面の男らしい顔
それに、１８０センチ以上というデカイ身長
確かに、イケメンだろう

「あれっ？緒形じゃねぇか（裕介の親は裕介が中２の時に離婚しました）」

気付かれた
最悪だ、また虐められるのだろうかあいつに

「へぇ～緒形と知り合いだったのか。じゃあ上山は緒形の隣な」

「ウィ～ス」
上山はそう返事をして、僕の隣の席に座った

「よろしくな、緒形」
上山は、また虐めてやるぜという顔で挨拶した

「う、うん」
僕は、それだけ言って目を逸らす

「緒形、本当に大丈夫？顔色スッゴイ悪いし、体震えてるよ」
小林さんが心配そうな顔をしながら言う

「平気、平気。ちょっと腹が痛いだけだから」

「ならいいけど・・・・・・」

キーンコーンカーンコーン
ＨＲ（ホームルーム）が終わるチャイムが鳴るとクラスの女子は、すぐさま上山のと

ころへ行った
「ねぇねぇ、上山君って彼女いるの？」
「いないよ」
「ほんとに！？じゃあさ私と付き合ってよ」
「ハハハハ、考えとくよ」
エライ人気だな
「ホント、上山くんって緒形とは大違いだよねぇ～」
「まぁね。俺はカッコいい系であいつはダサい系みたいな？」
「そうそう」
ほっとけ！！どうせ、僕はダサい系ですよ
「おい、緒形」
いきなり、上山が話しかけてきた
「な、何？」
「パン買って来いよ」
「・・・・」
今の僕はどんな顔しているのだろうか
ビックリしている顔か
恐怖に満ちている顔か
多分、両方だと思う、だって心の中がそうだから

「冗談だってだから、そんな顔すんなよ」
上山は僕の頭に手を乗せながら言った

「キャハハハ、上山君おもしろーい」
もう、こんなの嫌だ
僕は、変わるんだ
虐められない自分に、葵さんを守れる自分に、自分に自信を持てる自分に変わるんだ

「やめてよ。僕は、昔とは違うんだ！！もうこんなことするのやめてよ！！」
僕の頭に乗ってる手を振り払い怒鳴った

「何、キレてんだよ」
上山は僕を睨む
でも、もう中学生の時みたいにはひるまないぞ

「じゃあ、どう変わったか、今度試してやるよ。楽しみにしときな」
上山はそう言いながら笑っていた、周りの女子も
もしかしたら、この時怒鳴ったのがいけなかったのかもしれない。
でも、僕は後悔はしない
初めて、上山に自分が思ってることを言えたから
僕は、少し変われた気がしたから

最終章　第1話　転校生（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
ホントにこの小説って展開が急ですよね（笑）
まぁ、こんな小説ですが楽しんでいただけたら嬉しいです
後、執筆中、間違えて「怒鳴った」の「っ」が抜けてしまい、「どなた」になったのを見て一人大爆笑をしてしまいました
どうでもいい話で、すいません（汗）

感想、評価、お気に入り登録、お願いします

最終章　第2話　「答え」不安と安らぎ（1）（前書き）

どうも、こいん０７１２です
お気に入り件数、目標の１０件になりました
マジで嬉しいです。お気に入り登録してくださってる方々にマジ感謝です
後、感想も増えてきてるので嬉しいです
しかし・・・第三章で終了にしようと思ってたのですが、ここまでお気に入り登録が増えたり感想が増えたりすると、もう少し書きたいと思う、今日この頃です
まぁ、出来たら第五章ぐらいまで頑張りたいと思います

ではっ本編どうぞっ！！

最終章　第2話　「答え」不安と安らぎ（1）

僕は今、葵さんを待つ為、学食でラーメンを食べている
朝は、うどんの気分だったが何故か急にラーメンの気分になったので
でラーメンを食べている
今日の僕は、調子が変だ
箸が少しずつしか動かない
これも、あの上山が僕に不安を与えているからだろう
また、虐められんじゃないかという不安
「どこが違うか俺が試してやるよ」この言葉に対しての不安
葵さんも標的にされるんじゃないかという不安
上山の存在が僕に大きな不安を与える
たった、一人の存在だけで心はおかしくなるのだ
昔の僕のように大勢の人ではなくて、今の僕のようにたった一人の
存在だけで心は不安で一杯になる
不安だけじゃない・・・恐怖も上山は僕に与える
世界が滅びかけている時のような恐怖
実際僕の、世界は上山のせいで壊れかけてきているのだが・・・・・

この、不安はどうやったら無くなるのだろうか、僕はどうやったら
上山からの恐怖を無くせるのか
誰に聞いてもわからない、自分で答えを出さなければいけない
不安や恐怖は誰かに与えられるもの、答えは自分で出すもの、一見、
筋が通ってるようで、通っていない。与える側は与えるだけで済む、
後は相手が苦しむのを見るだけ、答えをだす側は、考え、悶え、苦
しまなければいけない。どう考えてもおかしい、分かり易く言うな
らこれを虐めに当てはめればいい
虐める方は与える者、虐められる方は答えを出す者、こう考えると、
与える者が喜び、笑い、楽しんでるのがわかる。そして、答えを出

す者がどれだけ、不安に満ち、悶え、苦しんでいるのかが
分かる

僕は、答えを出せたから良かった。
しかし、答えを出せなかった者は「自殺」この間違った答えにたどり着いてしまう
与える者はズルイ、自分は与える癖に答えを出す者が間違った答えを出すと
知らない振りをし、自分は反省をしようともしない
そして、時間が経つと皆、答えを出す者の事を忘れていく・・・・・
何も無かった様に、答えを出す者が最初から存在しなかったように
忘れていく、本当は、忘れちゃいけないのに、もうこんな事が無い
様にって忘れちゃいけないのに皆は忘れていく答えを出す者のこと
を、頑張ったのに間違った答えを出してしまった者の事を・・・・・
・・・・・・

久しぶりにこんな事を考えた、こんなバカげた事を・・・・これも、
上山のせいだろう、人のせいにしちゃいけないのはわかってる。で
も、今回はあいつのせいだ。上山という存在が居るから僕は、考え
悶え、苦しむのだろう
僕は今、答えを出す者となって答えを探している。いくつもの答え
の中にあるたった一つの答えを

最終章　第2話　「答え」不安と安らぎ（1）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
今回は、かなり短かったと思いますが、これにはちゃんと理由があるんです
今回で、裕介は上山の登場によって考え、悶え、苦しんでいる事がよーく分かると思います

今回の話は、裕介視点から言うと「問題」になるんです
そして、第三章で裕介はこの「問題」の「答え」を見つけるという話にしたかったので、短めの話にさせて頂きました
問題があまりにも長いと解く気になりませんからね（笑）

後、今回かなり暗い話になったと思います
実はこの小説の一つ一つの章にはテーマがあったんです
第一章は「初恋の人と何度かのキス」がテーマでした
第二章は「二人の絆」がテーマでした
そうかな？と思う人も居ると思いますが僕的にはそのテーマに沿って小説を書いてるつもりなんです
そして、第三章は「イジメと答え」がテーマです
なので、暗い話ばかりだと思うんですが、読んで貰えると嬉しいです
僕も実は虐められていたので、虐めの表現が生々しくなると思いますなので、苦手な人は読むのやめておいたほうがいいかも知れません

いつも、明るくやってきた後書きですが今回は少し暗くなってしまいました
すいません（汗）

次回からは話は暗くなると思いますが後書きは明るくやっていくの

で、よろしくお願いします

感想、評価、お気に入り登録の方もよろしくお願いします

最終章　第3話「答え」不安と安らぎ（2）（前書き）

どうも、こいん０７１２です誰かが評価ポイントを下さったみたいで、合計評価が３６点になりましたありがとうございますそして、これからもよろしくお願いします

後、三章で終了することにしました
出来るだけ皆さんを納得させるようなフィナーレを飾りたいと思いますので
最後までお付き合いください

最終章　第3話「答え」不安と安らぎ（2）

「裕ちゃん、お待たせー」
僕が、バカな事を考えながら待っていると葵さんがやって来た

「どうしたの？そんなに息切らして」

「裕ちゃん待たせてるから、廊下走ってきちゃった」
葵さんは、苦しい顔をしながら微笑んだ
この時の、葵さんの笑顔を見ると不安が少し、和らいだ気がした
少しだけど、今の僕からした、かなり大きい
僕は、感じた葵さんも与える者なんだと、しかし葵さんが与えるのは、不安や問題、恐怖じゃなくて
正反対のもの「安らぎ」
彼女の笑顔を見ると、僕の心が安らぐ、落ち着く

「どうしたの？裕ちゃんジィーと私の顔見て。もしかして、私の笑顔に見とれちゃった？」

「うん。見とれてた」
向こうは冗談のつもりで言ったんだろうか？僕が正直に答えると葵さんは顔を真っ赤にして、小さな声で「嬉しい・・・・」と呟いた
照れてる葵さん可愛い♪
ああ、葵さんにキスしたい、でもここ学食だからな出来ないか

「葵さん帰ろ？」

「うん・・・そだね」
僕と葵さんは下駄箱に向う

「あのさ、葵さん今日、僕の家に来ない？」

「う～ん、誘ってくれるのは嬉しいんだけど、もう６時だからなぁ・・・」

「葵さんがいいんだったら、夕飯もご馳走してあげれるけど」

「裕ちゃんの手料理？」

「うん」

僕の家は、親が離婚したため母さんが夜遅くまで働いてるので家事全般は僕がやっている

だから、料理は出来るし、掃除、洗濯も出来る

たまに、美奈が手伝ってくれるけど

「じゃあ、行く！！やったー裕ちゃんの手料理♪手料理♪」

葵さんはルンルン状態になり、下駄箱から靴を出し履き替えた

僕達は、正面玄関から出て校門の外に出た

校門にたどり着く前に運動場でサッカー部が練習しており、その中に何故か上山も居た

そして、僕はあいつと目が合い、おもいっきり睨まれた

こういうのだけでも、不安になってくる

どうしたら、この不安から脱出できるのだろうか

まだ、答えは見つからない

というか、見つか気がしない

僕は、このまま不安という名の暗闇でずっとさ迷う気がした

「裕ちゃん、大丈夫？顔色悪いよ」

葵さんが僕の顔を覗き込みながら言う

「大丈夫、大丈夫」
僕達は、手を繋ぎ歩き出した

「ねぇ、裕ちゃんさ、この前私を襲った時、胸見た？」
はいっ？何で急にそんな事を、見たというか・・・・・・無理矢理脱がして触ってたからな・・
ヤバイ、思い出して恥ずかしくなってきた

「私ね、胸小さいから、裕ちゃんどう思ってるかな～っと思って。
里香が男子は皆、巨乳が好きって言ってたから」

小林さん、アンタ人の彼女になに言ってんですか・・・・小林さんのせいで僕はこんな質問に答えなきゃいけないのか・・・・まぁ、いいんだけどさ
でも、どうやって答えよう？別に僕、巨乳好きってわけじゃないし、でも、貧乳好きってわけじゃないし・・・・・

僕が、思ったことを直接言えばいいのかな？よし、そうしよう

「そんなことないよ、僕巨乳好きってわけじゃないから・・・・・
僕は、葵さんの胸見て可愛いって思った触りたいって思った。だから、小さいのはそんなに気にしなくてもいいと思うけど」

「ほんとに？」

「ホントに」

「そっか良かった～私、胸小さいから裕ちゃんに嫌われると思ったから」

僕は、そんな低く見られてるのか？
別に胸の大きさぐらいじゃ、嫌いにならないっつぅの

「僕は、そんな事では嫌いにならないから安心してよ」

「そうだよね・・・・なんで私こんな事に悩んでたんだろ？悩んでた私がバカみたい！！」

こんな会話をしていると、僕の家に着いた
思い出せば今日、千佳が居るんだっけ
今日というかこれからずっと居るのか・・・・・
最悪だな、これから出来るだけは外にいる事にしよう

「ただいま～～」　「お邪魔しまーす」
僕と葵さんはドアを開け家の中に入る

ーー葵ーー
「ジュースかなんか持ってくるから先に僕の部屋行っておいてよ」

「わかった」
私は、階段を上り、裕ちゃんの部屋に入る
そして、裕ちゃんのベットの上に座った
何故かは自分でも解らないけどここに座ると安らぎというか、気持ちが落ち着く
そして、このまま寝転がったりしてーーー
ボフっこの擬音と一緒に私は、裕ちゃん布団を顔をうずめる
ああ、裕ちゃんの匂いがして気持ちいい
裕ちゃんの匂い私、好きだな♪なんか落ち着くし

バタンッ

ドアが開いた
ヤバっ匂い嗅ぐ事に夢中で、裕ちゃんが階段上がってくるのにまったく気付かなかった

「葵さん、何してるの？」
机に、おぼんを置いて迫ってくる裕ちゃん
どう言い訳しよう？どうしよう？

「え・・・・と、これはその、布団の匂いを嗅いでたというか」
何、私ストレートに言ってんのよ、裕ちゃんが引くに決まってるじゃない
私のバカ、バカ

「えっち」
裕ちゃんはそう言うと私にキスしてきた

「・・・っん」
裕ちゃんの舌が入ってくる
結構、無理矢理だけどこの前みたいに、恐くは無い
優しくてあったかい裕ちゃんのキスだから

「ねぇ、葵さんしていい？」

えっ？それってエッチだよね？
いきなり恥ずかしくない
でも、私も裕ちゃんとならしたいかも・・・

「家の人は？」

「いなかった」
ちょっ裕ちゃん！？
まだ、「いいよ」とも言ってないのに裕ちゃんが服を脱がし、胸を触って首筋にキスをしてくる
裕ちゃんってこんなに大胆だったけ？
違うよね、何でこんな大胆になったんだろ
でも、今回はこの前みたいに、無理矢理なのに全然、嫌じゃない
私の体も裕ちゃんを求めているから
私も、裕ちゃんとエッチしたいから

「じゃ、じゃあいいよ。・・・あんっ！！」
私、感じてる、裕ちゃんに胸触られて、感じてる・・・

「葵さん、可愛い」

「裕ちゃんのバカ・・・・・」

私達は、この後エッチをした
私の始めてを裕ちゃんにあげれてよかったな、裕ちゃんも始めてみたいだったけど

「気持ちよかったね♪」
エッチの終わった後は、そんなに恥ずかしくもなく、初めて同意の上でやったキスの後みたいな感じだった

「うん・・・・」
裕ちゃんは、かなり照れてるみたいだけど

「さっ裕ちゃんの作ったご飯でも食べますか」

「わかった、ちょっと待っててね。今、作るから」
私達は、1階に降り私は、皿やらお箸やら、お茶やらを用意した
裕ちゃんは、黙々とご飯を作っている
・・・・十分後・・・・・・・
「お待たせ」
裕ちゃんが皿に盛った、スパゲティを持って来た
「うわぁ、美味しそう♪」
「まぁ食べてみてよ」
座りながら、笑顔で言う裕ちゃん
「うん、じゃっいただきまーす」
「いただきます」
「うーん、美味しい」
「ホントに？良かった、葵さんに喜んでもらえて」
私、今幸せだなーー好きな人と一緒に居れて、一緒に笑えて・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・私は思いもしなかったこの幸せが
いとも簡単に壊されるなんて

最終章　第3話「答え」不安と安らぎ（2）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます何か裕介がヤンデレ化しそうとの感想があったんですが、その前にかなりエロくなってきたような気がするのは僕だけでしょうか？何とかして、裕介の性格を戻していかなければ（燃）　感想、評価、お気に入り登録お願いしマース

最終章　第４話　僕対２年全員&教師（葵、里香以外の）（前書き）

どうも、こいん０７１２です

皆さんのおかげでＰＶ１５０００突破しました

ありがとうございます

メッサ嬉しいです

ユニークで１００００突破してぇ

最終章　第４話　僕対２年全員&教師（葵、里香以外の）

いつも、通りに登校する僕
葵さんは風邪をひいた為今日は学校を休むらしい、帰りに葵さんの家、寄ってみようかな
葵さんと僕の家は結構近いので学校帰りに寄りやすい
でも、葵さん大丈夫かな？結構、彼女が病気になると心配になる
何かお土産に持っていこう何がいいかな？僕は、風邪ひいてる時はプリン貰えると嬉しかったけどな
よしっプリンを持って行こう
そんな事を思いながら、いつも通りに下駄箱で靴を履き替えようと思い下駄箱に行くと、上靴が無い
・・・・・・・・多分、上山関係だな
別にいいや上靴なくても
僕は、探そうともしないで自分の教室に向った
階段を上ってる時も廊下を歩いてる時も周りの様子が変だ
皆、僕をジロジロ見てるし、中には悪口を言ってる奴までいる
これだけで、逃げたくなる。でも、僕は答えを見つけなければいけない、たった一つの答えを
だから、僕は逃げない、絶対に逃げない

そして、教室の前に着いたとき、僕は、危険を察知した
しかし・・・・・・遅かった
僕は、教室に入っていたのだ

「ウィース、緒形。お前がどう違うのかさっそく試してやる」
そう言って上山は僕を殴ってきた
いきなりの顔面
まじかよ、久しぶりに味わったぜこの痛み

僕は、失神したかの様にその場に崩れ落ちる

「どこが、変わってんだ？お前なんかただ単にザコで何のも出来ないうじ虫だろ。お前は所詮、変われねぇんだよ！お前は高校卒業するまで、俺にイジメられんだよ！！」
上山は、倒れてる僕を何度も、何度も蹴る

ああ、マジで痛てぇ
ホントにこいつは、加減を知らないのかね
多分、口切れて血出てるなこの味は
「上山君！もっとやっちゃえーー」

「やれやれーー」
やっぱり、与える者はズルイ、自分は楽しんでるんだ、皆からも応援される
なのに、答えを出す者は、正解を出せたとしても、誰も認めてくれやしない
この世の中ホント不公平だよな
もし、神様がいるんだったら、僕は恨むよ神をこんな世界を創りやがってって僕は恨む

「お前なんか生きてても意味ないんだよ」
そう言って、上山はどこかに行こうとする

僕は、このままなのだろうか変われないままなんだろうか？
変わりたい、変わりたい、こんな僕から変わりたい
こんな僕から、強い僕へ
上山に勝てる僕へ

「うわぁぁぁぁぁぁ」

立ち上がり、上山に突っ込んで行った
そして、上山に後ろからタックルをかます
そのまま、僕は上山の上に乗り上山の動きを封じる

「なんだテメェ」
お前も、僕と一緒の痛み味わってみろよ
お前も、お前も・・・・・・お前も！！

僕は、無言で上山の顔を殴り続けた
力は、無いかもしれないけど夢中で殴り続けた
夢中で、これでもかってぐらい、
でも、僕がされてきたのは、こんなもんじゃない
だけど、これ以上やるのは周りが許さなかった

「お前、調子乗ってんじゃねぇぞ！！」
そう言った、上山の仲間が僕を上山から引き離す

「離せっ！！」
必死にあがく僕
もっとあいつを殴らせろ、上山をなぐらせろっ！！

「おい！お前等止めろっ！！」
教師が止めに来た
どうやら、僕が上山を殴っていたのを見ていたみたいだ

・・・・・職員室・・・・
「何があったんだお前等」
生徒指導の若松が聞いてくる

「上山君が歩いていたら、緒形がいきなり襲ってきたんです。だから、みんなで止めていたんです。緒形を」
上山の付き添いで来ていた、香我美が嘘を話す
何か二人は付き合ってるらしい
僕の予想からだと、女子は上山が牛耳っていて香我美が男子を牛耳っているのだろう

「本当か？上山」
上山は黙って頷く
嘘付けよ先にやってきたのはお前だろ
嘘付けよ・・・・・・嘘付けよ

「じゃあ、一方的に悪いのは緒形みたいだから、緒形お前は、一週間の停学処分だな」

おいおい、僕には聞かないのかよ、それに僕の怪我は無視ですか
いっつも、そうだ。教師に助けを求めても向こうが知らないふりをすれば何もしない
そして、また殴られる。僕、どんだけ損してるんだろう

僕は、黙って職員室を出る
「おい！まだ話は終わってないぞ」
話は終わってないって人の話もまともに聞けない奴が何言ってんだよ
僕の話はスルーするくせに、何自分だけ聞いてもらおうとしてんだよ
マジで、死ねよ・・・・・・って声に出さずに言っても意味ないか

「？」
僕の目の前には小林さんが居た

「緒形、私さっきの事ちゃんと話すよ」

「やめときなよ。そんな事したら今度は小林さんが標的にされちゃうよ？僕の事はほっといて貰っていいからさ」
小林さんは泣き出した
何でかはわからないけど泣き出した

僕は、泣いている小林さんの横を通って下駄箱に向った
いつもの、僕なら謝っていたと思うけど、今の僕はいつもの僕ではない
「緒形のばか！！」
もう、何とでも言ってくれ

考えても、答えなんか出やしない
僕が変わるしかないのか？
でも、変われない
変わろうとしてるのに・・・・変われない
変わりたいのに、変われない

やっぱり僕は神を恨むよ。どうして、僕をこの世に産ませたのかって
僕が存在しなかったら、こんな思いしなくて済んだのに
もう嫌だ、こんな思いをするのは、こんな思いを
・・・・

最終章　第４話　僕対２年全員&教師（葵、里香以外の）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
イジメはそんなリアルに書きませんでした
リアルに書き過ぎると読者数が減ってしまう気がするので（笑）

やっぱり、今回暗い話になってしまいましたね～～
多分、次回も暗い話になると思います

感想、お気に入り登録、評価、よろしくお願いしマース

最終章　第5話　間違った答え（前書き）

どうも、こいん０７１２です
今回は、短い話になると思います

最終章　第5話　間違った答え

僕は、ある思いを抱いて屋上に向っていた
階段の一段、一段が長く感じる
何でだろう？そんな事はどうでもいいか僕は死ぬんだから
もう、死にたい。自分の存在をこの世から消したい
もう苦しい思いをするのは嫌だ

ギィィ
屋上の扉を開ける
ぬるい１０月の風が吹いてる
この風の音さえも今の僕に不安を与える
いつもは、気にしない風の音でさえも

僕は、人がいないかどうかを確認すると柵に近付いていった
そして、屋上の柵をこえ下を見下ろす
僕は、ここから落ちれば死ねるんだ
この世から存在を消せるんだ
もう、嫌な思いをしなくていいんだ
もう、考えなくて、悶えなくて、苦しまなくていいんだ

死ぬのは恐いでも、生きるのはもっと恐い
恐い、恐い、恐い、恐い
僕は、呪文のように何度も繰り返す

ごめん葵さん僕、死ぬよ
この世から消える、僕を忘れて幸せになってね

僕は、屋上から飛び降りた

僕の、体は落ちていく
だん、だん地面に近付いていく

「私も、裕介君の事が好きです、大好きです。だから・・・・・お付き合いする話はＯＫです」

「ゴメン、祐ちゃん。もう私我慢できないよ
もっと祐ちゃんに触れたいし、抱きしめたいしキスもしたい
だから今日だけでも抱きしめさせて」

「祐ちゃんサイテーバカ！アホ！マヌケ！」

「失礼なんですけど、あなた誰ですか？」

「ずっと、一緒にいようね♪」

「心配しなくていいよ。私は裕ちゃんを捨てたりしないよ。嫌いになったりしないよ。
だから、安心して？後、出来るだけ、だけどほかの男の人にも会わないから」

「裕ちゃん、私も大好き♪」

「私ね、胸小さいから、裕ちゃんどう思ってるかな～っと思って。
里香が男子は皆、巨乳が好きって言ってたから」

「裕ちゃん、大好きっ！！」

葵さんとのことが、走馬灯が見えて

笑ってる葵さん、泣いてる葵さん、照れてる葵さん、怒ってる葵さん
僕の見てきた、感じてきた、葵さん全部、僕の頭の中に入ってくる
人は、死ぬ直前になると走馬灯が見えるというけど、本当だったんだ
でも、何でこんな物が見えるんだろう？
どうでもいいや。考えるのはもう止めよう
もう、僕はこのまま死ぬだけ

じゃあね、美奈、千佳、母さん
じゃあね、葵さん

僕の身体が地面に叩きつけられる

「おいっ誰かが落ちてきたぞ。救急車」
全身が痛い、まぁ当たり前だろう、屋上から落ちたのだから
僕は、ゆっくり、ゆっくり目を閉じていく
ゆっくり、ゆっくり
僕は、死んでいく
間違った答えを出してしまった為死んでいく

最終章　第5話　間違った答え（後書き）

感想、評価、お気に入り登録、お願いします

最終章　第６話　死神さん、僕変われるかな？（前書き）

どうも、こいん０７１２です
今回は結構、ファンタジーな感じの話になっちゃったと思います

最終章　第6話　死神さん、僕変われるかな？

「ねぇ、君は何で死んだの？」
知らない声で誰かが話しかけてくる

そうか、僕は死んだんだ
もう、これで辛い思いしなくて、いいんだ
僕は、立ち上がった

「・・・・・・ここは？」
僕のがいるのは全体が真っ白の部屋だった
見渡す限り何もない部屋

「僕が質問したんだけどな～。まぁいいや。ここは、冥界、死後の世界だ。で、君が何故死んだか教えてもらおうか」

声の主を探すと何処にも居ない
この声は天の声という奴だろうか
声は子供っぽい声だ

「ねぇ、黙り込んでないでさぁ、話し聞かせてよ」

「・・・・・生きるのが嫌になったんだ。生きるのが恐くて、恐くて嫌になったんだ」

「へぇ～、だから自殺したの？」

「うん」
何なんだこの人は

人かどうかも、わからないし

「君さ、このまま死にたい？」

「？」

何を言い出すんだこの人は

何で死にたくて死んだのに、生き返らなければいけないんだ

「いや～実はさ冥界にも面倒なシステムがあってね。死んだ者にいろんな話しを聞いて、その人が死ぬべきかどうか、判断するんだ」

「じゃあ、僕はこのまま、死なしてよ」

「う～ん、そうしてあげたいの山々なんだけどさ・・・君、心の奥では死んだ事、後悔してるでしょ」

「してないよ！」

もう、早く死なしてくれよ

一刻も早く死にたいのに

「じゃあ、最後の質問するけど・・・・質問っていうか説教かな？恐くなって自殺したって言うけど君逃げてるだけだよ、恐怖から戦わないで、逃げるって最低だよ？

世界には逃げずに頑張ってる人もいるんだよ、なのに君は逃げてる最低な野郎だよ

もっと生きて、頑張ってみなよ。自分から、死ぬなんて一番やっちゃいけない事なんだよ？」

うるさい・・・・お前になにがわかるんだよ。僕の何がわかるんだよ逃げずに頑張れ？僕は、頑張ってきたよなのに、なのに何も変わら

なかった
いつになっても、ダメな奴だったんだよ
「・・・るさい」
「？？？？」
「うるさい！！僕の気持ちなんかお前に解るか！！」
「わかりたくも無いね自殺者の話しなんて、だけど君がもし生きる事を希望するなら、君がどう恐怖と戦うか、には興味ある。君もさ本当は生き返りたいんだろ？」
僕が生きたがってる？死にたくて死んだのに
何で、生き返らないといけないのさ
・・・・・・でも、僕は死神さんの声に心を動かされていた
ほんの少しだけど、頑張りたい。頑張って恐怖から抜け出したい
自分の答えを出したい
変わりたい！！！！！
「・・・きたい・・・生きたい。もっと生きて恐怖と戦って自分の答えを出したい！！」
「何だ言えるじゃん、自分の気持ち。いいよ生き返って、そこの門を抜ければ現世に戻れるから」
「ありがとう、死神さん」
「何で、僕が死神ってわかったの？」

「僕の目の前にいるじゃん死神の格好して」
死神さんは僕の目の前に姿を現していた
鎌を持っていて本当に想像通りの死神だった

「ねぇ死神さん。僕変われるかな？強い僕に。恐怖と戦える僕に」

「さぁね？でもさ、変わりたいって思うんなら、変われると思うよ」

僕は、死神さんの方を向いて微笑む
変われるって言ってもらって嬉しいから
僕は、現世に行ける門に向って歩き出した

「あっそうだ、君、僕にお礼言ってたけど言わなくてもよかったのに
君には一度死んだ代償として、ペナルティを背寄ってもらうからさ」

「えっ？何それ」
僕が聞いた時には遅かった、もう僕は門をくぐってたから

「・・・・・・・・・・」
僕の意識が覚めた
ここは・・・・屋上かな？屋上だ
本当に僕、生き返ったんだ
生き返った気分は不思議と清々しかった
さぁ、明日から頑張ろう。変わるために
でも・・・僕、停学処分受けたんだっけ
・・・・・・・・・まぁ、一週間後から頑張ろう

・・・・・・・それにしてもペナルティって何だろ？

最終章　第6話　死神さん、僕変われるかな？（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
今回は、前書きでも言ったようにかなりファンタスティックだったでしょう
生き返れた裕介ですが、次回から大変な事に・・・・・・
感想、評価、お気に入り登録、待ってマース

最終章　第7話ペナルティ（前書き）

どうも、最近メキメキと調子に乗ってるこいん０７１２です
評価やらお気に入り登録で総合ポイントが５８点になりました
嬉しいです。読者の皆さんありがとうございます
この後も何か書こうと思ってたんですが忘れました
・・・・・・すいません
今から土下座します

今、土下座してます
だから、許してください

最終章　第7話ペナルティ

僕は、６時くらいに目が覚めた

ああ、僕停学くらってたんだっけ

どうしようかな・・・・やる事も無い、寝よう

僕は布団にくるまった

プルルルル♪

携帯が鳴る

知らない番号・・・・・まぁいいや

「もしもし、緒形ですけど」

「あっ緒形君？僕だけど覚えてる？」

覚えてるって、この声もしかして

「死神さん・・・・・？」

「そうそう死神、死神、死神、死神、死神」

何回、繰り返すんだよ

「５回だよ」

えっ何で僕の思ってることわかったの？

「死神は相手の思ってることがわかるの・・電話を通じて」

死神スゲェェ

「凄いでしょ」

「・・・・・・・・・」

それより、何で死神さんが僕の携帯知ってるんだろう
ていうか、冥界から現世に電話出来るんだ

「あのさ、ペナルティの話だけど、君の停学ってやつ無しになったから」

「えっ停学が無くなるのがペナルティなの！？」

「そうだよ、だってあれでしょ、停学って休みなんでしょ、特別な」

「違うよ・・・・・」
この死神バカだ、多分、千佳よりバカだ

「えっそうなの？？？・・・・・まぁ、いいや変更するのも面倒だし」
えらい、適当な死神だなぁ、おい
仮にも神なんだからもう少ししっかり、しろよ

「わかった」

「じゃあ、変われるよう頑張ってねぇ。後、そんなに僕をバカにしてると殺すよ」
そう言って、死神は電話を切った
死神、恐っ！！
なんていう死神だ・・・・・・・でも、それが本業か

最終章　第7話ペナルティ（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
前書きの時、忘れてた事を今、思い出したので発表さして頂きます

なんと！！この小説ＰＶ２００００突破しました
イエーイ、イエーイ、ポー（マイケル風）
すいません、調子乗りすぎました。そして、マイケルファンの人すいません
でも、それだけ嬉しいという事です
マジで、嬉しいです
今までありがとうございました
そして、これからもよろしくお願いします

ここで、今回の話の説明をさして頂きます
今回は、ダークな話の連ちゃんにならない様に少し笑えて明るい意話にしました
笑えないと思いますが、無理にでも笑ってもらえると嬉しいです

えっ？そんなのはいいから土下座しろって？
・・・・・わかりました。男こいん謝罪の為（何のだよ）土下座しましょう

スイマセンでしたっ！！！！！！
今、ジャンピング土下座しました
エッ？見えないって？
見たかったら僕の家まで来てください
自力で・・・・・・・

こんなバカな僕の為に、感想、アドバイス、お気に入り登録よろしくです

最終章　第8話　イジメの悪化（1）（前書き）

どうも、最近彼女もいないのに浮気してーなぁーと思ってる、こいん０７１２です
お気に入り登録が一件減ったので悲しいです
僕が何したってんだぁ～
やっぱり、最近調子に乗りすぎたかな？

最終章　第8話　イジメの悪化（1）

死神から電話があった後、僕は準備をして、千佳と美奈の朝食を作り学校へ向った

今日も、葵さんは風邪をひいているので、一人で登校している
あーあ、葵さんがいないと寂しいな～
今日も、上山達に虐められるのか・・・・・
この、二つの思いが僕を不安にさせる

まだ、自分の答えを出していない
でも・・・・いつか出さないと昨日みたいに間違った答えをだしてしまう事になるだろう
もう、死なない、絶対に自殺はしない。そう決意し教室入ると

「よくも、昨日は殴ってくれたなぁ！！！」
そう言って、上山におもいっきり殴られた
見事、頬にクリティカルヒット
かなり、痛てぇ

僕は、机に突っ込んでいく

「っつ・・・・」
背中を、机で強打した
骨は大丈夫だろうけど・・・・・この、痛みは1週間ぐらい続くなはぁ～、帰ったら美奈に手当てして貰おう

僕は、何も無かった様な振りをして、自分の席に座った
無視、無視、ああいうのは、構ったらダメなんだ

我慢すれば、いいんだ。僕自信の答えを出せるまで

「ちょっと、緒形大丈夫？」
小林さんが話し掛けてくる
僕に話しかけたらダメだよ
小林さんまでイジメられる
無視しなきゃ・・・・・ゴメン、小林さん僕の事心配してくれてるのに

「おい、何無視してんだよっ！」
そう言って、僕のむなぐらを掴む信二
上山の次は信二かよ。っていうか、僕らの友情はそんなもんだったんだ
ひでぇよ、信二。簡単に友達を捨てるなんて。強者の方に付くなんてホントに僕ってダメな奴なんだな・・・・・

僕は、信二に腹を殴られた
上山程の力は無いけど、やっぱり友達に殴られる一発は心も傷付いただって、僕は信二のことを本気で友達だって思ってたから
僕の心は裏切りという言葉でいっぱいだった

「キーンコーンカーンコーン」
なんにも知らないＨＲ（ホームルーム）開始のチャイムが騒がしい教室にのんきに響く

「ちっ今は、これくらいにしておいて、やるよ」
そう言って、自分の席に座る、上山集団
僕も、吹っ飛んでいる机とイスを元に戻し座る

「おっはよー」
何も知らない父ちゃんが、教室に入ってくる

「どうしたの、父ちゃん今日、気分良さそうジャン」
「いやー実はな、昨日彼女できたんだよ」
「えっそうなの！よかったじゃん父ちゃん！」
そんな、話でクラスは盛り上がってる中、僕は自分の席から立ち上がった
「おい！緒形、どこ行くんだ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
僕は、父ちゃんの言葉を無視して、教室を出て行った
今日は授業サボろう
でも、何処でサボろうか？
屋上？アソコは不良が溜まってるだろう
・・・・保健室でも行くか

「失礼しまーす」
僕は、枯れた声でそう言いながら、保健室のドアを開け中に入った
「どうしたの？緒形君」
「ちょっと、体調悪いんでベット借りますね」
別に嘘は言ってない、体調は上山集団に殴られたので若干悪い
「まぁ、いいけど」
僕は、その言葉を聞くと、保健室のベットで横になりカーテンを閉

めた

別に、眠くないから寝ないでいいか・・・・・・

と思ってたけど、僕はいつの間にか寝ていた

最終章　第8話　イジメの悪化（1）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
次回と、その次で裕介は大きな壁にぶち当たります
裕介は、答えを出せるのか！！！

感想、評価、お気に入り登録、よろしくお願いします

最終章　第9話　イジメの悪化（2）（前書き）

どうも、最近腹が出てきたこいん0712です
ヤバイ（汗）ダイエットせねば（笑）
まぁ、そんだけです
では、本編どうぞっ！

最終章　第9話　イジメの悪化（2）

僕の目が覚める

いつの間に寝てたのか・・・・

僕が目をコスリ、ベットの横にある上靴を履いていると

「どう？調子は良くなった」

いきなり、保健室の先生に話し掛けられた

「・・・・・・はい」

「君さぁ、もっと愛想良く出来ないの？」

先生は、髪を触りながら言っている

「出来ますよ・・・・・特別な人だけに」

「ふぅん、恋人？」

「はい。僕の大事な人です」

何を言ってるんだか僕は・・・・よしっもう、教室帰ろう

僕が保健室を出ようとすると「待って！」と引き止められた

「君、何か悩んでるでしょ」

「まぁ・・・・・」

この人は、早く帰してくれないのか？

ホントに迷惑だ

「そのまま、ほっとくと、大切な人の事まで嫌いになるよ？」
僕が、葵さんを嫌いになる？
ありえない、そんな事。葵さんの事は大好きなのに・・・・・嫌いになるなんてありえないよっ！！！

「ご忠告ありがとうございます。失礼しました」
僕は、ドアを開け保健室の外に出る

チクショー、まだ先生の言葉が頭に残ってる
何で、イジメが葵さんを嫌いになるのと繋がるんだよ
もしかして、葵さんもイジメに参加するとか？
それは、ないよな・・・・じゃあ、なんなんだよ！
さっきの先生も与える者だったみたいだ
先生は恐怖、不安じゃなくて、問題だけを出す人だった

僕が教室に戻ると上山集団が、僕を睨んだ
僕は、それを無視して自分の席に座る

僕が、黒板に書いてあることを写していると、何かが飛んできた
・・・・・・・・・ゴミ？
それは、クシャクシャになった紙だった
僕が広げるとそこには「今日、体育館裏に来い」そう、上山の字で書いてあった
・・・・・・・これで、決着を付けよう
僕は、そう思い体育館裏に行こうと決意した

僕は、今体育館裏に向っている
やっぱり、恐い
でも、恐っがってるだけじゃ、変われやしない
この、恐怖を不安を乗り越えてこそ僕は、変われるんだ
人間だれだって恐い事が2，3個あるだろう
でも、僕は死ぬ気になれば、それを、克服出来る事を知っている
頑張れ僕、頑張れ僕
僕は、自分で自分を応援した後、体育館裏に着いた

「待ってたぜ・・・緒形」
僕はやっぱりダメな奴だ・・・・
僕が気付いた時には、もう遅く隠れていた、上山の部下に身体の身動きが取れぬよう抑えられた、立ったまま

「何、授業サボってんだよっ！！」
そう言って、僕の腹を何度も何度も殴る上山
喋ったのは、その一言だけで、後は黙ったまま僕を殴り続ける上山
僕の何が気に食わないんだろうか？
顔？性格？わからない、わからない考えるたびに頭がおかしくなっていく
わからない、わからない・・・・・・・・・ワカラナイ

「死ねぇ」
久しぶりに喋った上山は、今日一番の力で僕の顔を殴った
上山の部下が僕を、掴んでいた手を離すと僕は、そこに倒れこむ

クソぉ、決着どころか何も言えなかった

何も・・・・・上山に何も言えなかった
僕は、やっぱり変われないの？ねぇ、死神さん変わりたいって思っても変われないよ
なりたい自分に変われないよ・・・・・

「ペッ」
上山たちは僕に向って、唾を吐いてどこかに行った

僕は、まだ立てずにいる
変われない自分が悲しくて、悔しくて。ダメな自分にイライラして。
ねぇ、神様。何でこの世の中はこんなに不公平なの？
僕も、与える側になりたいよ
もう、答えを探すのは嫌だよ
苦しいよ、苦しいよ・・・・クルシイヨ
もう、嫌だ・・・・

ザーザーザーと雨が降ってきた

雨の冷たさが身体に染みる
冷たい・・・・雨をこんなに冷たいと思ったのは初めてだ
雨が降ってるんなら、泣いてもいいよね
ちょっとぐらい、泣いてもいいよね
僕は、冷たい涙を流した
大声ではなく、静かに泣いた
静かに、息を殺して。大声でなくと、誰かに見られそうだったから

僕は、空を見上げふと思う
これは、雨？違う。空が泣いてくれてるんだ
僕に、同情してくれて泣いてくれてるんだ
多分、思い込みだろう。でも、こう考えると少し悲しみが減った気がした
ほんの少しだけど・・・・悲しみが不安が恐怖が減った気がした

そうか、神様は不公平じゃないんだ
答えを出す者を少しだけ、少しだけだけど手伝ってくれるんだ・・・・・
僕の不安という闇に少しだけ光が見えた気がした

最終章　第9話　イジメの悪化（2）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます
あくまで、予定ですが後、８話ぐらいで終わる予定です
最終章・・・・長いですね

感想、アドバイス、お気に入り登録お願いします

最終章　第１０話　異変

ーー葵ーー

あー頭痛い、薬飲んでも全然、治らないし。は～裕ちゃんに会いたいな～お見舞いに来てくれないかな～。裕ちゃんが来てくれたら、すぐ治りそうなのに。

やる事もないし、また寝よう。

プルルルルル♪

私が、布団に潜ると携帯がなった。

もしかしてっ裕ちゃん！？

早く出なきゃ。

私は、携帯を手に取り受信ボタンを押す。

「もしもし、葵？」

何だ里香か～。期待して損した。

「どうしたの里香」

「何で、アンタそんなにテンション低いの？」

「風邪ひいてるからに決まってるでしょっ」

本当は、裕ちゃんと思ってたら、里香だったからなんだけど。

「そうだったね、ゴメン、ゴメン」
里香、電話の向こうで笑ってるし。
「あのさ、葵。緒形、葵とこ来た？」
「来てないけど・・・・」
えっ裕ちゃんに何かあったの？
え～、私、寝てる場合じゃないじゃん。
「緒形さ、今クラスでイジメられてるんだよね」
「そうなんだ・・・」
私は、そっけない返事しかできなかった。
この言葉を聞いて私の心は、不安で溢れていたから。
裕ちゃん、別れようなんて言わないよね。大丈夫だよね。
中学生の頃、裕ちゃんにはイジメが原因で一度振らたから、私は、
また振られるかどうか心配でしょうがなかった。
裕ちゃんの事だから、「葵さんも標的にされるから」とか言いそう
だ。
恐いよ私、裕ちゃんが私の前から消えると思うと恐いよ。
「ありがとね、里香」
「うん、じゃあお大事に」
「バイバイ」
私は、そう言うと携帯を切り、ベットに倒れこんだ。

でも、大丈夫だよね。
うん、大丈夫だよ。
よしっ早く風邪治さないといけないから、もう寝よう！！
でも・・・やっぱり心配だな

ーー裕介ーー

「ただいま」

「おかえり。お兄ちゃん。どうしたの？ビショビショじゃん」
美奈が、焦った顔で言う。

「傘忘れてて」
僕が、そう言って階段を上がろうとすると。

「お風呂、入ってきなよ」
うるさいな～。もう、僕のことは、ほっといてくれよ。

「いいよ、別に。着替えるから」

「ダメだよ。ちゃんと、お風呂入らないと」

「うるさいなっ！僕のことは、ほっといてくれよ」
何で、怒鳴ってるんだろ僕
今まで、美奈にあたった事なんてないのに
今まで、美奈に怒った事はあっても、怒鳴った事なんてないのに

「ご、ゴメン」
美奈は泣きそうな顔をして、僕に謝った

そんな、顔すんなよ。余計にイライラする。
人と、接してるとイライラする。
何だ？この気持ちは。ダメだ押さえきれない

僕は黙って、階段を上っていった

僕は、自分の部屋に入ると、濡れている制服を脱ぎ私服に着替えた

何だ、この感情は。何なんだこのイライラは。
というか、人と接するのが恐い。美奈でも、恐い
これは、イライラじゃない恐怖だ。
でも、何で美奈にまで恐怖を感じるんだ？
女子恐怖症の時は大丈夫だったのに・・・・なんで？

何なんだよ、この気持ちは。
誰か教えてくれよ。もう自分で答え出せないよ
誰か、答えを教えてくれよ。
この、苦しみから解放される答えを

最終章　第１０話　異変（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

やっと、光が見えてきた裕介。その裕介に異変が？

次回で、その真相が明らかになります（予定）

ということで、次回も楽しみにしてて下さい

最終章　第１１話　大切な人だけは（１）

「お待たせっ！！」

手を振って走って来る葵さん。
葵さんの風邪はあ完治したみたい。

「別に待ってないよ。走って来なくても良かったのに」

「そう？なら良かった。じゃあ行こっか」

微笑みながら葵さんは、僕の手を握ろうとした。

「っ！！」

え？なんで・・・いつも、なら普通に握ってたのに。なのに何で避けてしまったんだろう。
自分でも分からない・・・体が勝手に動いた。

「どうしたの？」

「いや、ちょっと久しぶりだったから・・・」

「そっか」

僕は黙って頷いて葵さんの手を握ろうとした。

・・・ダメだ握れない。葵さんに触れるのが・・・恐い。
恐くて堪らない。なんで？女子恐怖症は治ったはずなのに・・・なのに、何で葵さんが恐いの？
ダメだ・・・寒気が凄い。
今にも体中が震えそうだ。
それ程、恐い。今まで葵さんに触れることも平気だったのに・・・。

「葵さんゴメン。僕、体調悪いみたいだから学校休むよ。ゴメン・・・」
葵さんが、また恐くなったなんて言えない。絶対に言えない。

「そうなの？大丈夫？」

「うん、なんとか。悪いけど一人で学校行って」

「うん！じゃあね。無理しちゃダメだよ～」

僕は、笑顔で葵さんを見送った。

ホントは大丈夫なんかじゃない・・・でも、葵さんを不安にさせたくないから。

・・・・裕介宅・・・・

「お、裕介お帰り～。って、早過ぎないか？」

「ああ、ちょっと気分が悪くて」

「そかそか。部屋で休んどきな」

「……」

僕は階段を上がり自分の部屋へと入って行く。

なんだ、この気持ち美奈と喋った時と一緒の…このイラつきは。
何で人と喋ってるとイラつくんだ？
何で人が恐いんだ？　葵さんも、そう…美奈だって千佳も。
今度は女子に限らず皆、皆。もう全員が恐いっ！！
なんでだ？　ねえ…なんでなんだよっ。

考えても…分からない。分からないんだよっ！！
いつまで僕は苦しめばいいの？　いつまで考えればいいの？
…頭が痛くなってきた。もう、寝よう。

最終章　第１１話　大切な人だけは（１）（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました。
…短すぎてすいません。
えーと句切りが良いので今回の話「大切な人だけは」は短い話での３話構成とさしていただきます。
なんか、ややこしくてすいません。
謝ってばっかだな…僕

良かったら感想、お気に入り登録、評価などをお願いします。

最終章　第１２話　大切な人だけは（２）

「ゆ～ちゃんっ」

「わっ」

僕が目を開けると葵さんの顔が、目の前にあった。

「な、なんで…」

「体調悪いって言ってたからお見舞いに来たんだけど…大丈夫？」

「う、うん」

まただ葵さんが恐い…。葵さんと喋ってるとイライラする。

前までは、こんな事無かったのに…

「ねえ裕ちゃん…手、触るね」

そう言って葵さんは僕の手を触ろうとした」

「っ！」

葵さんの手が触れた瞬間…僕は葵さんの手を振り払った。

「え？」

「あっ…ゴメン」

触れるのも嫌だ…恐い…。
どうして？　この前は大丈夫だったのに触ってもキスしても大丈夫だったのに

「…やっぱり裕ちゃん私の事、恐がってるんだね…」

「……」

僕は黙って頷く。
なんでバレたのだろう…やっぱり今朝のか。
やっぱり分かるよね黙っててもも。
もう、嫌だよ…考えるのも、こんな思いするのも

「私がいけないの？　そうだったら…謝るから恐がるのやめてよ。
もう、あんな思いしたくないよ！」

「分からないんだ…僕にも分からないんだよっ！　なんで葵さんがっ、全員が恐いのかっ！
分からないんだよ…」

僕は怒鳴った…初めて葵さんに。葵さんに怒鳴った。
喧嘩もしたことない葵さんに…
今の僕はいつもの、僕ではないんだろう…だから葵さんが恐いんだ。

とか、思ってみるけど僕は僕。いつもの、僕だ。
恐がってるのも僕。怒鳴ったのも僕

「葵さん…ゴメン。僕…もう耐えられないよ。別れよう…」

もうダメだ。

人と接するのが恐い…もう、葵さんのこと好きなんて言ってられないよ。
こんなに恐いのに…触れるのが嫌なのに好きなんて…。
保健室の先生が言ってた事はこういうことだったんだ。見事に当たったか…。

「なんで、そういう事言うの？　私のことを気にして言ってるんだったら我慢するからっ。前みたいに我慢するからっ！　…だから、分かれるなんて言わないでよ…」

「…ゴメン」

「裕ちゃんのバカッ！」

葵さんはドアを開け僕の部屋から出て行った。

…これで、いいんだよ。葵さんに辛い思いさせるだけなんだから。
もう…これで、いいんだ。

ー千佳ー

「あれ、葵ちゃんどうしたの？　ゆっくりしてきなよ」

「え…と…この後、用事あるんでっ！　お邪魔しました」

「う、うん」

どうしたんだろ…少し泣いてた気もするし。それに、悲しい顔してたしな。
祐に聞いてみるか。

私は祐の部屋へ向うために階段を上った。

ー葵ー

…祐ちゃんのバカっ。
なんで恐いからって別れるに繋がるのよっ！
…裕ちゃんはいつもの優しさで私をフったんじゃないんだよね。
私が恐いからって…つまり私の事が嫌いになったって事だよね…。
そう考えれば少しはマシになるかな？
マシになるわけないよ。私は裕ちゃんと、もっと、もっと一緒に居たかったのに。
でも…それも今日でお終い。じゃねっ！　裕ちゃん…

ー裕介ー

バンっ！　千佳が僕の部屋のドアを蹴破った。
…マジでドア壊れてるし。

最終章　第１２話　大切な人だけは（２）（後書き）

最後まで読んで下さって、ありがとうございました。
次回！ただのブラコンと思っていた千佳が大活躍！…の筈。
なので次回も見逃さずに！。
次の話から段々と明るい話に変わってきます
よろしかったら感想、評価、お気に入り登録等、よろしくお願いします
感想とかは書いて頂けるともう、バリバリにやる気が出るんでっ！

最終章　第１３話　大切な人だけは（３）

「ねぇ、葵ちゃん泣いて出て行ったけど…どうかしたの？」

千佳は少し心配そうな顔で言っている。

「別れた」

…思えば最低の別れ方だよね、もう少しマシな別れ方したかったな…葵さんとは。

あー、最低なのは僕か…人が怖いからって葵さんをフるなんて最低だよね。

「はぁ？　あんなに仲良かったのに？」

「うん」

ダメだ…やっぱり千佳も怖い。

「なんで…別れたの？」

「なんでって…別にいいじゃんか理由なんてどうでも」

もう、ほっといてくれよ僕のことなんか…結局、人は変われないんだよ、どれだけ変わろうとしても変われないんだ…。僕はヒーローなんかにはなれない、ピンチの時にはすぐ駆けつけるヒーローにはなれないんだよ。

「どうでもよくないでしょっ！」

「じゃあ言うよっ！　人が怖いんだ葵さんも千佳も美奈も母さんも全員っ！　…人が怖いんだ。もうこれでいいだろ、部屋から出て行ってくれよ」

僕は涙を流した。大粒の涙、心の中では悲しくないつもり…なのに勝手に涙が出る。

止まれよっ！　止まれっ、止まれ…止まれっ！！

”バンっ！”

えっ…？

僕は千佳に頬を叩かれた…千佳には何度も殴られている。

でも今回のは痛い…けど、なんだろ頬が痛いんじゃなくて心が痛い。

「何、甘ったれてるのよっ！　人が怖い？　そんな、ちんけな理由で好きで好きでたまらない人と、大好きでたまらない人と別れるってバカじゃないの？」

千佳は呆れた顔で言う。

お前に何が分かるんだよ…悩んでいる僕の苦しい思いしてる僕の…

「お前に僕の何が分かるんだよっ！」

「分かりたくもないね、今の祐の気持ちなんか…」

分かりたくない…か、死神さんと一緒のこと言われちゃったな。

「祐さ昔、私が何になりたい？　って聞いたら人を笑顔に出来る人って言ったよね？」

「…うん」

確か言ったな…でも、昔のことだろ？　今は関係ないじゃんか。

「祐はさ…葵ちゃんを泣かしたんだよ？　悲しませたんだよ？　葵ちゃんは祐にとって大事な人なんでしょ？　大切な人なんでしょ？　大切な人を喜ばせれずに笑顔に出来ずに…人を笑顔なんかに出来るかっ！　私のことだったら怖がってもいい、美奈のことも母さんのことも…全員を怖がってもいい。
けどね、大切な人だけは…泣かしたら、悲しませたらダメなんだよっ！
祐、お前も男だろ？　男だったら大切な人ぐらい守ってみせろよ、幸せにしてみせろよっ！　笑顔に……笑顔にしてみせろよっ！！！」

そんなこと言われても…無理だよ。怖い怖いんだ。

「僕には…無」

「甘ったれるな祐っ！　お前なら出来るから…人を笑顔に出来るから…きっと出来るから頑張ってみろよっ！」

僕は…人を笑顔に出来る？　葵さんを…笑顔に出来る？
いや出来るじゃない…しなくちゃいけないんだ。葵さんを笑顔にしなくちゃいけないんだ。
葵さんを笑顔に出来なくて何が守りたいだよっ！　何が変わりたいだよ…何がヒーローだよっ！
当たり前のことも出来てないのに…甘ったれてるんじゃないぞ、僕

っ！！
もう、迷わないぞ…もう怖くないぞ。
「千佳っ！　サンキューな」
「…うん」
微笑みながら千佳は言う。
千佳の微笑みは安心でき…怖くなかった。
「あっ、ドアは直しとけよ」
「え。ちょっと待ってよ、これ私が直すの！？　普通、お礼として直してくれるんじゃないの！？」
「甘ったれるなよ…千佳」
僕は笑いながら、そう言い階段を駆け下りて行った。
ちゃんと笑えてたかな？　さっきまで泣いてたから自信ないや。
「あ、お兄ちゃんどうしたの？」
「出かけてくる！」
「ん、いってらっしゃ～い」
「行って来ます」
僕は葵さんの家へと向い猛ダッシュで走った。
葵さんは家にいるかどうか分からない…でも、僕はガムシャラに走

った。
待っててね葵さん…僕が……僕が葵さんを笑顔にしてみせるからっ！
ーー千佳ーー
「お兄ちゃん、凄い勢いで出て行ったけど…って何してるのお姉ちゃん！？」
「ドア壊しちゃってね、修理してんの」
まったく姉も辛いね、バカな弟を持つしドアも直さないといけないし。
まー、祐はバカだから可愛いんだけどね。
しかし良い笑顔だったな～アレは…私の言葉が届いたんだな、きっと。
次は祐、お前が人を笑顔にする番だぞ、頑張れよ～祐。
「お姉ちゃん…下手すぎ」
「だって私、こういうの苦手なんだもん…」

最終章　第１３話　大切な人だけは（３）（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございますっ！
どうでしたか？千佳、活躍したでしょう？
この話は個人的には気に入ってるんですよね～。
あのブラコンの千佳がカッコ良すぎる話なんでね、こんな姉欲しいっ！とか思ってしまうんですよね書きながら（笑）

感想、お気に入り登録、評価の方もよろしくお願いしますっ！

最終章　第１４話　約束～三度目の告白～

僕は葵さんの家へと向って走る、がむしゃらに…全力で走る。
家に居ないかもしれない。何処にいるか分からない…携帯も家へ忘れてきてしまったから連絡も取れない。でも、葵さんに会える気がした。
なんとなく、だけど…根拠は無いけど会える気がした。
疲れてきた…だけど、そんなの知るか！
僕は…僕は葵さんを笑顔にしなきゃならないんだ！
ハァハァ…とりあえず葵さんの家に着いた。
ガラっ
僕はドアを開けた。
「すいません！　葵さんは居ますか？」
「いや…帰って来てないけど」
葵さんのお兄さんがうどんを食べながら答えてくれた。
「そうですか、ありがとうございます」
「とんかつでも食べながら待ちますか？」
葵さんの、お父さんが珍しい標準語を使った。
「いえ、本当のヒーローになって来ます」

昔からなりたかった…憧れていたヒーロー。
悪者をやっつけるヒーロー。
だけど今の僕がなりたいのは、そんなヒーローじゃない…大切な人を守る大切な人を泣かせない…大切な人を笑顔に…笑顔にする、そんなヒーロー。
葵さんは言ってくれた僕がヒーローだって、葵さんにとって僕はヒーローだって。
今の僕はヒーローなんかじゃない…ただのバカだ。
だけど、バカのままじゃダメだから、なりに行くよ憧れのヒーローに本当のヒーローに。
待っててね葵さん、もう泣かせないから…笑顔にしてみせるから！

「あっはっはっは。そうですかィ、じゃあ頑張ってくだせぇ」

「はい」

僕はドアを閉め走り出した。
葵さん…一体何処にいるんだ。
考えろ…好きな人にフラれたら…別れたら何処に行く？
葵さんなら、どうする？　いや、あそこじゃない！　もっと…もっと思い出がある場所だっ！
思い出のある場所…思い出…学校じゃない僕の家でも葵さんの家でもゲームセンターでもない。
何処だ…考えろ僕、今まで一体何を見てきたって言うんだ。
考えろ…考えろ。
分かったぞ。そうか…あそこか！

ーー葵ーー

あ〜あ、来ちゃったな…裕ちゃんと私が結ばれた川原、来ても意味無いのにな〜
私と裕ちゃんは終わった、別れた…だけどね、私裕ちゃんのことがまだ好きなんだ。
そんな簡単に嫌いになれないよね……裕ちゃんのこと本気で好きだったんだから。
こんなことなら…こんなことなら裕ちゃんのこと好きにならなきゃ良かったな。
苦しい思いするんなら…こんなに悲しい思いするんだったら好きにならなきゃ良かった。

「裕ちゃんの…裕ちゃんの」

「僕が何？」

裕ちゃんは息切れしながら言った。
え…裕ちゃん？
なんでここに…
どうして？　私が怖いんじゃないの？　嫌いになったんじゃないの？

「葵さん！　貴方を笑顔にしに来ました」

ーー裕介ーー

「僕が何？」

やっぱり…ここに居た。
僕と葵さんが付き合うことになった川原。
生まれて初めて女の子を抱きしめた場所、思い出の場所。

「どうして、ここに…」

「葵さん！　貴方を笑顔にしに来ました」

僕はそっと…葵さんへ近付いて行く。
怖くない、さっきまで怖くかった葵さんが怖くない。
葵さんに触れれる。

僕は葵さんの手を握った。

「大丈夫なの？　怖くないの？」

「怖いわけないよ。だって葵さんは僕の…僕の世界でたった一人の大切な人なんだから」

「でも、さっきは…」

確かに…さっきは怖かった。
でも、気付いたんだ千佳の言葉で、大切な人は泣かしちゃいけないって笑顔にしなきゃいけないって。

「もう、怖くないよ。気付いたんだ…大切な人は泣かしちゃいけないって笑顔にしなきゃいけないって。だから僕は葵さんを笑顔にしに来た。…もう悲しませないよ、ゴメン…葵さん」

僕は握っていた手を離し葵さんを抱きしめた。

「裕ちゃんの…バカ」

「ゴメン」

やっぱり僕はバカなんだ。
でも…バカのままでは終われない。
葵さんを泣かしたままじゃ終われないんだ。

「許さない…」

やっぱり…許してくれないよね。
こんな最低な僕を許してくれるはずないよね。

「許さない…次別れるなんて言ったら、もう二度と許してやらないんだからねっ」

葵さんは涙を流しながら…僕に抱きつきながら言った。
葵さんの体は温かくて…上手く表現できないけど、こう包まれるような感じし安心できた。

「うん…もう二度と言わないよ。葵さん、好き。だから、僕ともう一度付き合ってくれるかな？」

「…そんなの、良いに決まってるじゃんか。本当に悲しかったんだからね、寂しかったんだからね…
うっ、う…うわーん！！」

葵さんは大粒の涙を沢山流した。
この涙は僕が流さしたんだな、葵さんを笑顔にするために来たけど逆に泣かしちゃったや。
ホント僕ってバカだな。

「ゴメンね、ゴメンね葵さん。葵さんが僕にとって大事なんだかけ

がいのない存在なんだ。だから…もう、離さない。ずっと一緒にいよう？　ずっと一緒に…ずっと、ずーっと一緒に」

「うん…約束だよ？。」

「分かってる。約束するよずっと一緒にいるって」

僕は葵さんを力を入れ抱きしめる。
笑顔にするつもりだった…でも出来ないや。
葵さんに、また触れられたことが嬉しくて涙が出ている。
葵さんも同じ気持ちでいてくれてるのかな？　嬉しいって思っていてくれてるのかな？
きっと…思っていてくれてるよね。分からないけど…葵さんの温もりから、そう感じれた。
いつか…いつになるか分からないけど本当のヒーローになるから、葵さんを笑顔に出来るヒーローになるから。
だから…待っててね葵さん。

最終章　第１４話　約束～三度目の告白～（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます！
皆さんのおかげでお気に入り登録数が増え評価点?が増え、なんと！９７点まで上り詰めました。
目標の１００点まで後少し…ラスト３～５話くらいで１００点に出来るよう頑張りたいと思います。
なんか最終回っぽい話になってすいません！
サブタイの説明ですが一回目が校舎裏での葵からの告白。二回目が川原での裕介からの告白。三回目が今回となっています。

評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします

最終章　第１４，５話　その後の日常（前書き）

久しぶりの投稿…楽しみにしてた方にはホント申し訳ないです。
部活やら勉強やらが忙しくて…これからまた頑張って行きたいと思うのでよろしくお願いします。

最終章　第１４，５話　その後の日常

葵さんと仲直りしてから…あれから一ヶ月が経った。
飽きたのか上山達からのイジメは無くなり葵さんと楽しい毎日を過ごしている。
ちょっとずつ、ちょっとずつだけど変われている気がする…だけど、まだまだヒーローになるには遠いんだろうなぁ。

「ゆ～っちゃん！　どうしたの？　ボーっとして」

明らか走って来ただろうと思える葵さんは僕の背中を叩きすぐさま腕を組んできた。
早っ…僕の背中を叩いて腕を組むまでのスピード日に日に速くなって行ってないか？
それにしても今日も可愛いなぁ、葵さんは。信二が隣に居ると「ノロケてんじゃねーよ」って笑いながら言いそうなことを心の隅でそっと思う。信二とは仲直りが出来…許すのには時間が掛かったけど、なんとか許すことが出来た。今まで以上に仲良くなれたんじゃないかな？　と僕は思っている。
「まさに雨降って地固まる」ってやつだ。

「何にも無いよ、少し考えごとしてただけ」

「そっか。じゃあ行こっ！」

葵さんはニッコリと笑いながら僕の腕を引っ張り歩き出す。

ホントに…セッカチだなぁ、葵さんは。

最終章　第１４，５話　その後の日常（後書き）

読み返して思ったんですけど…もうテーマから思いっきり外れてますよね、この話の流れ。やっぱり行き当たりばったりだと…おかしくなっちゃいますね。新しい小説書く時はある程度の流れを作ってから投稿しようと思います。

あ、今回は１４，５話ということでかなり短めの話になっております。

感想、お気に入り登録などよろしくお願いします。

最終章　第１５話　もう少しで

「もう少しでクリスマスだねぇ～お兄ちゃん」

美奈がコタツで寝転びながら嬉しそうに言った。

ああ…もう、そんな季節か。今年のクリスマスは葵さんとすごせると良いなぁ、この二人が居るからもしかしたら無理かもしれないけど。

「今年のクリスマスはどうすごす？　お姉ちゃんも居る事だしパァーっと行こうか！？」

「おお、いいねぇ。ケーキでも買って来てパァーっとやろう！」

「ダメだよ、お姉ちゃん！　ケーキは手作りじゃないと」

「なるほど！　それで祐のハートをキャッチするわけだな」

…コイツ等勝手に話を進ませてやがる。

ってかハートをキャッチって…僕には葵さんがいるから無理だと思うけど。まあ、葵さんが居なくても一緒だけどさ。

「あのさ、僕葵さんと一緒にすごそうかな～と思ってるんだけど」

僕が恐る恐る言うと美奈と千佳は案の定ギラっと目を光らせこっちを睨んだ。

うっ…美奈はともかく千佳が怖い。鷹に狙われる獲物の気持ちが分かる気がするほど怖い。

…どう説得しよう、プレゼント位じゃ納得してくれない気がするし

なぁ…。ヤバイ、何にも思いつかない。

「それは、どーいうことかなぁ？　祐。私たちってものがありながら他の女とクリスマスをすごすって浮気じゃないか！」

いや浮気じゃねーだろ！　とツッコミを入れたくなることを千佳は言った。

本当にどうしたものか…と、僕が悩んでいると「良いこと思いついた！」指をパチンと鳴らしながら言った。

「葵ちゃんも呼んで四人でパァーとやろうよ！」

さっきから難しい顔してるな～と思ってたけど、そんな事を考えていたんだ。

…葵さんと二人ですごしたかったけど千佳を説得できそうにないし仕方ないか。

明日にでも良いかどうか聞いておこう。

「おお！　それいいじゃん、さすが美奈！　さすが我が妹！」

姉の方はスッゲーバカだけどな…言ったら確実に殴られるから心の中にしまっておこう。

「祐がエッチなことする心配もなくなるしな」

僕が大きく溜息を吐くと変な目で僕を見て千佳が言った。

「なっっ…そんなこと、するわけないだろ！！」

急に何言い出すんだよ…まあ、ムードによってはするかもしれない

けどさ！　って僕は何を考えてるんだっ。考えるの止めなきゃ。

「顔真っ赤になってるぞ？　ホントはする気だったんだろ～」

「だから、そんなんじゃないって！　純粋に…二人ですごしたかっただけだよ」

ダメだ…嫌でも考えてしまう。頭に浮かんできてしまう。
僕ってこんなに変態だったのか！？　…そりゃ、葵さんとしたいって思ったことはあるけど今日みたいに葵さんが目の前に居ないときに思ったことはない。なんだろう自分にガッカリしたというか…自分が情けなくなった。

「ねぇ、お姉ちゃんエッチなことって何？」

「ん？　エッチな事ってのはなセッ「美奈に変なこと教えんなっつーの！　…いいか美奈、お前も大きくなったらいずれ分かるから。誰にも聞いちゃいけないぞ？」

美奈の頭を撫でながら僕は言った。
まったく…油断もスキもない奴だ。まだ小５の美奈に教えようとするなんて…普通はするか？　ってアイツは普通じゃないか。

「う、うん。分かった」

千佳とは違って美奈は素直だなぁ…最近あんまりベタベタしてこないしブラコン治ったか？
もし、そうだったら嬉しい。かなり嬉しい。
千佳のブラコンの方が治って欲しいけど……

「じゃあ、僕自分の部屋行くから。クリスマスの件は明日聞いておくね」

そう行って僕は二階へ上がって行った。

”ギィィィ”不快な音を奏でながらドアを開けた。

そして不快な音を奏でながらドアを閉める。

千佳に蹴破られ直してもらったものの…開け閉めする時の音が五月蝿い。

五月蝿いというか聞くたび鳥肌が立ち背筋がゾッとする。

黒板を爪で引っかいた音みたいな感じだろうか…うん、あんな感じだ。

「はぁ…」

溜息を吐き僕はベットに横になった。

そして何気に携帯の画面を見るとメールが一件着ていた。

誰からだろう…フォルダをチェックすると葵さんからだった。

『急に会いたくなったんだけどさ今から会えないかな?』

可愛い…なんだろう、とにかく可愛い。

僕はすぐに返信した。

『全然、大丈夫だよ。今から葵さんの家行っていいかな?』

僕は携帯を閉じ漫画を手に取ろうとした瞬間、携帯の着信音が鳴った。

は、早っ！　前から思っていたけど、なんでこんなに早く打てるん

だろう？　…普通慣れだけでこんなに早く打てないよね？　メールって考える時間もあるだろうし…凄いなぁ葵さんは。

『勿論だよ！　待ってるから！！』

んー、やっぱり可愛い。さっきまで葵さんの事考えてたからかな？　いつもより可愛く見えるんだけど…メールだけなのに。そう思いながら携帯を閉じ準備を始めた。

え～と、携帯と財布と…これくらいでいっか。

んー、上着は着て行った方がいいよね最近寒いし…って、もう冬だから当たり前か。

階段を下りリビングのドアを開けた。

「遊びに行って来るから」

千佳と美奈に言うと「は～い、気をつけてねお兄ちゃん！」「うい、事故んなよ～」と返ってきた。

…もしかして千佳のブラコンも治ってる？　なんか、やけに最近冷たい気がするんだけど…気のせいか？　なんだろう千佳が冷たいと少し寂しい…って、それはないない！！　ブラコンの千佳にウンザリしてたんだ寂しいわけないじゃんか！　…やっぱり少し寂しいよなぁ。

「じゃっ、行って来ます」

ドアを閉め玄関で靴を履きドアを開けた。

さっ、葵さんに会いに行こーっと。

僕は葵さんに早く会いたかったのか千佳のことなど忘れ小走りをして葵さんの家に向って行った。

最終章　第１５話　もう少しで（後書き）

ずっと言うの忘れてたんですが総合評価が１０８点になり目標の１００点超え達成しました！まだ最終回まで行ってないし、もしかしたらもう少し増えるかも？（笑

まあ、それは置いておいて…目標を達成出来たのは読者様と僕にアドバイスを下さった人達のおかげです！　本当にありがとうございます！　これからは新しい目標総合評価１５０点を目指し頑張って行きますので応援よろしくお願いします！

最終章　第１６話　クリスマスイヴ

「イェーイ！！」　「いぇ～い！」「い、いぇーい」

美奈と千佳がテンションを上げてハシャイでる。
最後の「いぇ～い」は葵さん。美奈達に合わしたんだろうけど…照れが残っているのかぎこちない。そんな葵さんを見て僕は可愛いなと思った。
今日はクリスマスイヴという事でクリスマスパーティーをしている…葵さんも呼んで四人で楽しんでるのだが僕と葵さんはテンションについてけず少し戸惑っているけど結構楽しんでる。葵さんも笑ってるし、こんなに楽しいクリスマスはサンタさんを信じていた年齢ぶりかもしれない。
去年までは美奈と二人だったし、母さんが買っていてくれたケーキを食べて寝るだけだったからこんなに賑やかなのは初めて、なにより葵さんと、好きな人と過ごせるのが嬉しい。葵さんとすごせるだけで幸せだ。

「祐、何ノロケた顔してんのよ！　さっさとメインのケーキ持って来ーい」

それに続いて葵さんと美奈が持って来～いと笑顔で言う。
葵さん照れが無くなったしテンション上がってきたな…となると、ついていけてないのは僕だけか…まあ、いいんだけどね美奈達といると、いつもこんな感じだし。

「はいはい、ただいま」

僕は立ち上がりキッチンへ向った。
美奈は「ケーキは手作りじゃないと！」とか言っていたけど結局、僕が作らされた。
理由は「私達が作ると失敗しちゃうじゃん」との事だ…じゃあ買ってくるよ、と言うと「お兄ちゃん（祐）の手作りがいい」と駄々をこねられ結局僕が作る事になった。
料理とか作るのは嫌いじゃないんだからいいんだけどさ…むしろ好きだし、でもちょっとくらいは手伝って欲しかったよなぁ。

「裕ちゃん、なんか手伝うことある？」

「ん～、別にないから大丈夫だよ。葵さんは座ってて」

「もし、手伝うことあったら言ってね！」

「うん」

それに比べて葵さんは優しいなぁ…葵さんと作れば良かったかな？
ケーキ。喜んで手伝ってくれそうだし、葵さんと作るのってなんだが楽しそうだし。っと、早く持って行かないと千佳に怒られそうだ。
ホールケーキを四人分に分け皿に乗せていく。それをジュースを入れたコップと一緒にオボンに乗せリビングに運んで行った。

「お待たせ」

ケーキが乗った皿とジュースの入ったコップを並べて行く。

「おい、祐これジュースじゃん酒じゃないじゃん」

「当たり前だろ。お前、以外未成年なんだから」
僕がそういうと千佳が文句を言ってきた。
正直コイツにお酒はあんまり飲ましたくない…昔僕の前で飲んだことがあるんだけど酒癖が悪いのか変なテンションになり泣きついてきたり人の顔に落書きし大笑いしたり…良い思い出が一つもない。
そういえば女装させられたときもあったっけ…あれは恥ずかしかったなぁ。

「うわっ、スッゴイ美味しいよお兄ちゃん！　さすがだね！」
当たり前だろ？　僕が作ったんだから。と、言って調子に乗ったけど実際不安だった…ケーキ作るの初めてだったし結構戸惑った部分もあったから…良かったな、喜んでもらえて。なんだか僕も嬉しいや。

「え、これ裕ちゃんが作ったの？　料理できるのは知ってたけど…ケーキも作れるんだ、凄いじゃん！」
葵さんが満面の笑みで言った。
もっと嬉しいなぁ、葵さんに褒めれるの。なんだか美味しそうに食べてくれてるし…千佳は今だに酒、酒言ってるけど無視、無視っと。

「あっ、裕ちゃんクリームついてるよ」
そう言うと葵さんは僕の下唇あたりの…舐めた。
ちょっ、なんて大胆なことするんだよ葵さん…美奈も千佳もいるのに、ああ～！　恥ずかしくてたまらないよ。
「へぇ、葵ちゃんも大胆なことするんだ。もしかして、いつもそん

なことしてるの？」

「そ、そんなんじゃありませんよっ。あはははは、なんかテンション上がっちゃっておかしな事しちゃいました」

葵さん顔真っ赤にして笑ってるし…多分、僕より恥ずかしいだろうな。だって、あれ千佳と美奈の居る前でキスをしるようなもんでしょ？　僕には到底出来ることじゃないし…どうしてあんなことしたんだろ葵さん。

僕が考えてると「ヒュー、ヒュー」って美奈と千佳がからかってきた。

僕と葵さんはまだ顔を真っ赤にしてモジモジしてる。

…何週間かこの事でからかわれるな千佳に。

千佳と美奈はテンションを上げすぎて疲れてソファーで寝ていた。

自分の部屋で寝ろよって声掛けたけど…あれは起きないだろうな。

僕と葵さんはと言うと…僕の部屋でゲームしています。

「あ～、やっぱり強いなぁ裕ちゃんは」

っと伸びをしながら葵さんは寝転んだ。僕も一緒になって寝転んでみる。

勢いで寝転んじゃったけど…どうしよう、葵さん僕の顔じっと見つめてるし、ああなんか恥ずかしいよ…なんだろう今日恥ずかしいことばっかりだ。何故だか分からないけど僕は千佳が言った言葉を思い出した。「祐がエッチなことする心配もなくなるしな」

最終章　第１６話　クリスマスイヴ（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9694k/

女子恐怖症＋ヒーロー気取りな奴＝僕

2011年10月6日20時35分発行